

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第87集

三千束遺跡群

MIYA

宮

ZOE

添

遺 跡

長野県佐久市三塚宮添遺跡調査報告書

2001.3

佐久浅間農業協同組合  
長野県佐久市教育委員会

三千束遺跡群

MIYA

宮

ZOE

添

遺

跡

長野県佐久市三塚宮添遺跡調査報告書

2001. 3

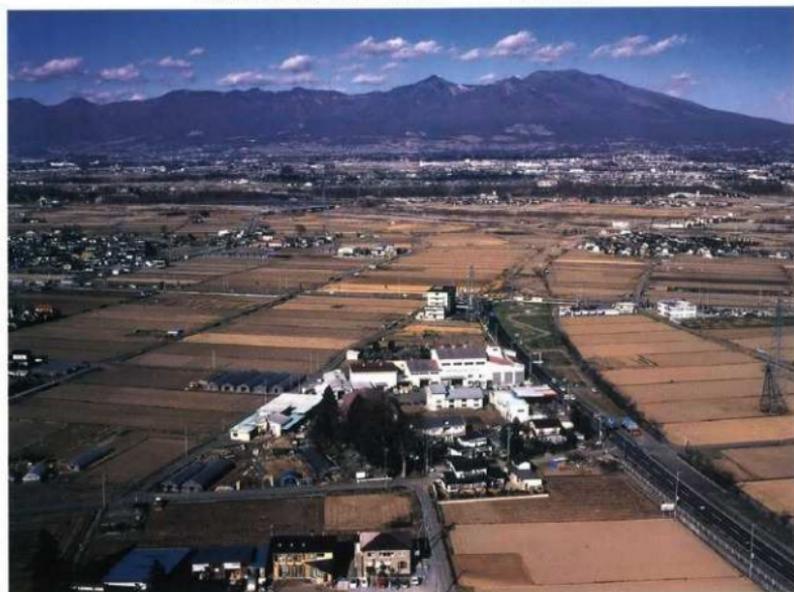
佐久浅間農業協同組合  
長野県佐久市教育委員会



宮道跡周辺全景（朝日航洋株式会社撮影）



宮浜道跡調査区全景（東から、株式会社ユー・アール測量設計撮影）



宮浜道跡周辺風景（南から、株式会社ユー・アール測量設計撮影）



H1号住居址（南から）



D3号土坑（東から）



D 3号土坑出土遺物



Ta2-1



P19-1



P19-2



P19-3

宮浜遺跡出土陶磁器

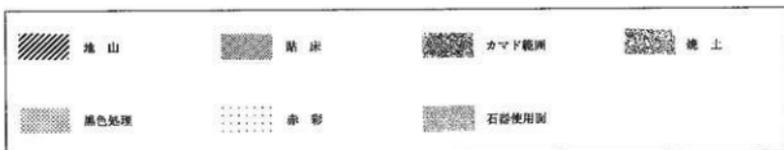
## 例 言

- 1 本書は、佐久浅間農業協同組合（平成12年3月1日より佐久市農業協同組合から商号変更）が行う事務所建設事業に伴い、平成11年度に行った三千東遺跡群宮添遺跡の発掘調査報告書である。整理作業、報告書刊行は平成12年度に行った。
- 2 調査委託者 佐久浅間農業協同組合
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名および所在地  
三千東遺跡群 宮添遺跡 (MMM)  
佐久市大字三塚字宮添 90-1 外2筆
- 5 調査期間および面積  
宮添遺跡 発掘調査 平成11年11月5日～11月30日  
面積 605㎡  
整理調査 平成11年12月1日～平成13年3月31日
- 6 本書の編集、執筆は出澤が行った。
- 7 本書および宮添遺跡出土遺物等すべての資料は、佐久市教育委員会の管理下に保管されている。

本調査にあたり、佐久浅間農業協同組合および地元の方々には数々のご協力、ご援助を頂き、また報告書作成に当たっても多くの方々のご指導、ご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

## 凡 例

- 1 遺標の略号は以下のとおりである。  
竪穴住居址-H 竪穴状遺構-T a 土坑-D ビット-P
- 2 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。  
竪穴住居址・竪穴状遺構・横列-1/80 土坑・カマド-1/40  
土器-1/4 石・鉄製品-1/3 古銭、玉類-1/1  
上記以外のものについては挿図中に明記した。
- 3 遺構の海拔標高は各遺構毎に統一し、水系標高を「標高」として記した。
- 4 土層、遺物胎土の色調は、1988年度版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
- 5 写真図版中の遺物の縮尺は概ね挿図と同じである。また、遺物番号と挿図番号は対応する。
- 6 住居址の面積は床面積（住居址下端範囲）を測定し、カマド部分は測定値より除外してある。
- 7 挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを示す。



# 目 次

巻頭図版  
例 言  
凡 例  
目 次

## 第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯と経過 .....	( 1 )
第 2 節 調査体制 .....	( 1 )
第 3 節 調査日誌 .....	( 2 )

## 第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 自然環境 .....	( 3 )
第 2 節 歴史的環境 .....	( 4 )

## 第 III 節 基本層序と概要

第 1 節 基本層序 .....	( 6 )
第 2 節 検出遺構・遺物の概要 .....	( 6 )

## 第 IV 章 遺構と遺物

第 1 節 竪穴住居址	
1) 第 1 号住居址 .....	( 7 )
3) 第 3 号住居址 .....	( 13 )
4) 第 4 号住居址 .....	( 14 )
第 2 節 竪穴状遺構	
1) 第 1 号竪穴状遺構址 .....	( 16 )
2) 第 2 号竪穴状遺構址 .....	( 18 )
第 3 節 土坑	
1) 第 1 号土坑 .....	( 19 )
2) 第 2 号土坑 .....	( 19 )
3) 第 3 号土坑 .....	( 20 )
第 4 節 構列	
1) 第 1 号構列 .....	( 21 )
2) 第 2 号構列 .....	( 22 )
3) 第 3 号構列 .....	( 22 )
第 5 節 ビット .....	( 23 )
第 6 節 遺構外出土遺物 .....	( 23 )
宮添遺跡住居址一覧表	
竪穴状遺構一覧表	
土坑一覧表	
構列一覧表	
ビット一覧表	
宮添遺跡出土遺物観察表	

## 第 V 章 考 察

第 1 節 調査のまとめ .....	( 29 )
第 2 節 宮添遺跡から出土した人骨について .....	( 31 )

写真図版

宮添遺跡全体図

# 第I章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査の経緯と経過

宮迹遺跡の存在する三千東遺跡群は佐久市大字三塚地籍に所在する。当地は千曲川と片貝川に挟まれた標高668m内外を測る沖積微高地にあり、遺跡周辺は圃場整備が行われた水田の広がる佐久平でも有数の穀倉地帯となっている。

今回、遺跡群内において佐久浅間農業協同組合（平成12年3月1日より佐久市農業協同組合から商号変更）により事務所建設事業が計画され、佐久市教育委員会に遺構の有無について照会があった。教育委員会では三千東遺跡群が所在するため試掘調査による確認を行い、結果、開発地籍より堅穴住居址、土師器、須恵器等の遺構・遺物が検出された。

その結果を踏まえ、佐久浅間農業協同組合と佐久市教育委員会、両者において協議が行われ遺跡の破壊が余儀ない状況であるため、佐久市教育委員会文化財課によって記録保存を目的とする発掘調査が実施される事となった。

## 第2節 調査体制

### 平成11年度

◎発掘調査受託者	佐久市教育委員会
	教育長 依田 英夫
事務局	教育次長 小林 宏造
文化財課	課長 草岡 芳行
	文化財係長 萩原 一馬
	文化財係 林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田 卓也
	富沢 一明、上原 学、山本 秀典、出澤 力

### 平成11年度

調査主任	佐々木 宗昭、森泉 かよ子
調査副主任	堺 益子
調査員	浅沼 ノブ江、内堀 団、小野沢 健二、島田 幹子
	中嶋 フクジ、橋詰 勝子、橋詰 信子、細堂 ミスズ
	山浦 豊子

### 平成12年度

◎発掘調査受託者	佐久市教育委員会
	教育長 依田 英夫
事務局	教育次長 小林 宏造
文化財課	課長 草岡 芳行
	文化財係長 萩原 一馬
	文化財係 林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田 卓也
	富沢 一明、上原 学、山本 秀典、出澤 力

### 平成12年度

調査主任	佐々木 宗昭、森泉 かよ子
調査副主任	堺 益子
調査員	荒井 ふみ子、内堀 団、小幡 弘子、柏原 松枝、菊池 康一
	小須田 サクエ、小林 まさ子、篠崎 清一、真嶋 保子
	波辺 長子

### 第3節 調査日誌

#### 平成11年度

平成11年11月5日

重機による表土剥ぎを開始する。

11月8日

機材搬入。表土剥ぎが終了する。

11月9日

遺構検出開始。T a 1号堅穴状遺構調査。

11月10日

調査範囲東側のピット群調査。H 1号住居址調査。

11月11日

雨天中止。

11月15日

T a 2号堅穴状遺構調査。

11月18日

D 1号土坑調査。H 2号住居址調査。

11月22日

D 2号土坑調査。

11月24日

H 3号住居址調査。

11月25日

H 4号住居址調査。

11月26日

D 3号土坑調査。

11月30日

ラジコンヘリによる航空撮影を行う。機材撤収を行い、現場での調査を終了する。

12月1日～平成12年3月31日

室内整理作業開始。土器洗浄、復元、図面作成を行う。

#### 平成12年度

平成12年9月27日～平成13年3月31日

室内整理作業。土器実測、図面作成、原稿執筆を行い、報告書を刊行する。



第1図 宮添遺跡位置図 (1:5,000)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

宮添遺跡が存在する三千東遺跡群は佐久市の南西部、佐久市三塚地籍に所在して、西南に蓼科山山塊、八ヶ岳山塊の山々を望み、遺跡から北東に1100m向こうを千曲川、西南に700m向こうを片貝川がそれぞれ北流する間の非常に平坦な沖積地上に立地している。遺跡周辺は現在水田が広がり佐久市でも有数の穀倉地帯を形成しており、その水田のほとんどが千曲川と比して流れの緩やかな片貝川から水を引いているという。

遺跡周辺の地形は大別して3つに分けられる。第1に遺跡西南に位置する蓼科・八ヶ岳山塊が形成する北東方向に伸びる丘陵地や、山間を流れる倉沢川、小宮山川などの中小河川に伴う谷口扇状地、第2に千曲川の自然堤防で帯状に広がる沖積地、第3にそれらに挟まれた片貝川の周辺に広がる沖積低地である。本遺跡はこの中で第2の地域にあり、千曲川的作用によって形成された沖積微高地上に立地する。

沖積微高地はかつて畑地や宅地として利用されていたが、圃場整備等の整備事業や開発によって水田などに姿を変えている。宮添遺跡は南北300m東西200m規模の沖積微高地上南東側の端に位置しており、調査区内は東へ緩やかに傾斜していた。

同じ微高地上では昭和49年度に市遺跡Ⅰ、平成10年度に市遺跡Ⅱの発掘調査が行われている。その結果古墳時代中期から中世、近世にかけての遺構・遺物が確認され、この地が連絡と人々の生活の場として利用されていた事がわかっている。



第2図 宮添遺跡位置図 (1:10,000)

## 第2節 歴史的環境

今回調査を行った宮添遺跡は三千東遺跡群の東端に位置している。本遺跡のある三塚地区をはじめ、前山、小宮山地区の山間・山裾部分や野沢、桜井地区の低沖積地ではこれまでの調査から多くの遺跡の存在が明らかになっている。ここで各時代、地域ごとに宮添遺跡周辺の歴史的環境について概観したい。

本遺跡から南西約5km、八ヶ岳北東山麓中に旧石器時代の遺跡である1、立科F遺跡が存在する。同遺跡では総数211点の石器群が検出されており、石材、検出土層より最古で31200±900という年代が与えられている。

沖積低地に面する山裾の丘陵や扇状地には、縄文・弥生時代の遺跡が認められ沖積地上に展開するそれ以降の古墳・奈良・平安時代などの遺跡とは対照的な分布を示している。縄文時代の遺跡では2、後沢遺跡、3、中村遺跡、4、筒村B・山法師B遺跡、5、瀬の下遺跡などが調査されており、前述後沢遺跡、6、西裏、竹田峯遺跡では弥生時代の住居址や周溝墓などが確認されている。

沖積地上では古墳時代以降の遺跡が多く確認されている。本遺跡の周辺は昭和40年代に行われた圃場整備事業によって水田が広がっているが、その際多くの発掘調査が行われ、その中でも本遺跡に隣接する7、市道遺跡Iは、南佐久の沖積地における埋蔵文化財調査の先駆となった調査の1つであり、それに前後する8、徳田遺跡や9、中道遺跡、10、三塚遺跡、11、三塚町田遺跡、12、鶴田遺跡、13、跡部町田遺跡などととも、佐久市における埋蔵文化財保護の推進に足跡を残した調査である。これらの調査では、古墳時代中期から後期、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

その後古墳時代後期と平安時代の住居址を調査した14、上桜井北遺跡、中期から後期の住居址を調査した15、寺添遺跡、後期の住居を調査した16、市道遺跡Ⅱといった発掘調査が行われた。前述の市道遺跡などを含めて、これらはいずれも千曲川の自然堤防上や沖積微高地上にあり、古墳時代中期以降、生活基盤の変化から当地における生活空間の中心が山間、山裾から稲作等の農業生産に適した沖積地に移行したことが見て取れる。

奈良・平安時代の遺構は筒村B・山法師B遺跡、上桜井北遺跡、寺添遺跡、市道遺跡Ⅱなどで認められている。その分布状況はほぼ前時代と同様の広がりを見せるものと考えられ沖積地上や山裾に集落が営まれていたと思われるが、いずれも調査範囲が狭く当地における奈良・平安時代の集落の全体像を把握することはできない。しかし、山裾に位置する17、標名平遺跡と前述した中道遺跡から奈良三彩と思われる蓋が出土していることから当地にこの時期の、豊かな集落が存在する可能性を指摘できる。

前述の市道遺跡Ⅱで調査されたM1号溝状遺構は圃場整備事業以前の地図にも記載されていた溝で遺構内から出土した遺物などより近現代から古墳時代にかけて使用されていた溝であることが分かっている。このことで当地が災害等により地形の変化など影響をあまり受けない地域だったことが推測されており、古墳時代以降の農業生産を中心とした生活を営んだ人々に安定した生活空間を提供したと考えられる。

中世鎌倉時代以降ではこの地は、佐久地方における有力豪族のひとつである伴野氏の本拠地となり、「一廻上人絵伝」の中に当時の伴野氏の活況な様子が伝えられている。本遺跡周辺の中世の遺跡では、伴野氏の手による物とされる18、前山城址や19、野沢館跡などがある。また20、薬師寺遺跡は野沢館跡内に近世初頭に移転されたと思われる薬師寺の本堂改築に伴う発掘で、近世中期から近現代にわたる寺院に關係する遺物が出土し、さらにその下からは野沢館跡に關係する池の跡が確認されかわかけ、土鍋といった中世の遺物が出土している。そのほか標名平遺跡では、中世後期の上葬墓、火葬墓といった墳墓群が調査されている。



第3図 宮添遺跡周辺遺跡分布図 (1:50,000)

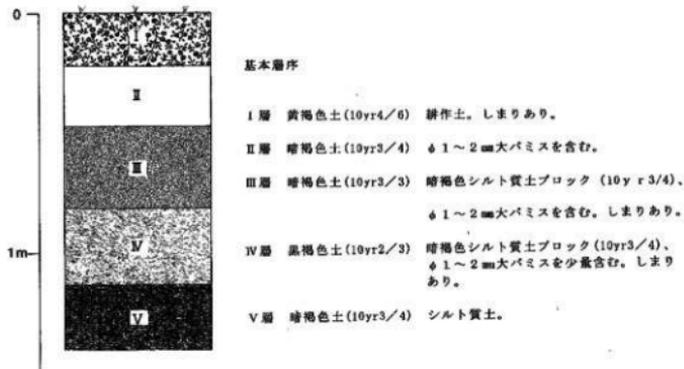
宮添遺跡周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	立地	旧	縄	弥	古	歴	中	近	備考
1	立科F遺跡	前山字立科	山地	○							平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	○	○	○	○				昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地	○							昭和57年調査
4	筒村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地	○				○	○		平成3・4年調査
5	瀬の下遺跡	前山字瀬の下	丘陵		○						平成2年調査
6	西表・竹田峯遺跡	根岸字西表・竹田峯	丘陵			○	○	○			昭和60年調査
7	市道遺跡Ⅰ	三塚字市道	沖積微高地				○	○			昭和49年調査
8	糠田遺跡	野沢字糠田	沖積微高地	○	○		○				昭和45年調査
9	中道遺跡	前山字中道	沖積微高地					○			昭和46年調査
10	三塚遺跡	三塚字東野沢田	沖積微高地	○	○	○	○				昭和49年調査
11	三塚町田遺跡	三塚字町田	沖積微高地				○				昭和49年調査
12	鶴田遺跡	三塚字鶴田	沖積微高地					○			昭和50年調査
13	跡部町田遺跡	跡部字町田	沖積微高地				○				昭和50年調査
14	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	沖積微高地				○	○			昭和52年調査
15	寺添遺跡	三塚字寺添	沖積微高地				○	○			平成6年調査
16	市道遺跡Ⅱ	三塚字市道	沖積微高地				○	○	○	○	平成10年調査
17	榎名平遺跡	根岸字榎名平	丘陵	○	○	○	○	○			平成5・6年調査
18	前山城跡	小宮山字城山	山地					○			
19	野沢館跡	野沢字居原敷・北田	沖積微高地					○			
20	薬師寺遺跡	原字原敷	沖積微高地						○	○	平成11年調査

## 第Ⅲ章 基本層序と概要

### 第1節 基本層序

本遺跡の基本層序は調査区中央部北側から抽出され、旧耕作土であるⅠ層を除くと4つの層に分けられた。本遺跡は南北300m東西200mの沖積微高地上南東の端に位置しているため、東側に向かって緩やかに傾斜していることが確認されている。耕作土より下のⅡからⅣ層は土中にシルト質土を含み、Ⅴ層はきれいなロームシルト質土である。Ⅱ層からⅢ層が遺構確認面である。



第4図 基本層序模式図

### 第2節 検出遺構・遺物の概要

宮添遺跡より出土した遺構・遺物は以下のとおり。

#### 検出遺構

堅穴住居址	4軒	古墳時代	2軒
堅穴状遺構	2軒	奈良・平安時代	2軒
土坑	3基		
溝列	3列		
ピット	39基		

#### 出土遺物

土師器、須恵器、石製品、鉄製品、古銭、青磁器、人骨、獣骨、白玉、管玉、ガラス小玉、土玉

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 竪穴住居址

#### 1) 第1号住居址

##### 遺構(第5～7図、図版二)

本住居址は調査区東部、あ・い-3・4・5グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面から検出された。他遺構との重複関係は北西コーナーにピット6・38、西壁にピット3・39、遺構覆土にピット1・2・4・35・36がそれぞれ重複し、新旧関係はいずれもこれらのピットの方が新しい。住居址東側は調査区外のため未調査で、住居址北側カマド部分に攪乱を受けていた。形態はほぼ方形を呈すると考えられ、規模は西壁長604cm、北壁長415cm(検出部)、南壁長82cm(検出部)を計測し得るのみである。カマドを中心とした主軸方向はN-32°-Wを示す。確認面からの壁高は西壁で44cmを測る。塋溝は検出されなかった。

覆土は12層に分割されたが、主体となるのは1・2層で3～5層は塋断でのみ認められ、カマドの間違層は5層に分かれる。床面は中央部を残して壁下を幅80～142cm、深さ約15cmほど掘り下げ、そこへ掘方第1層を埋め戻し貼床にしており、よく硬化して焼土が貼り付いていた。

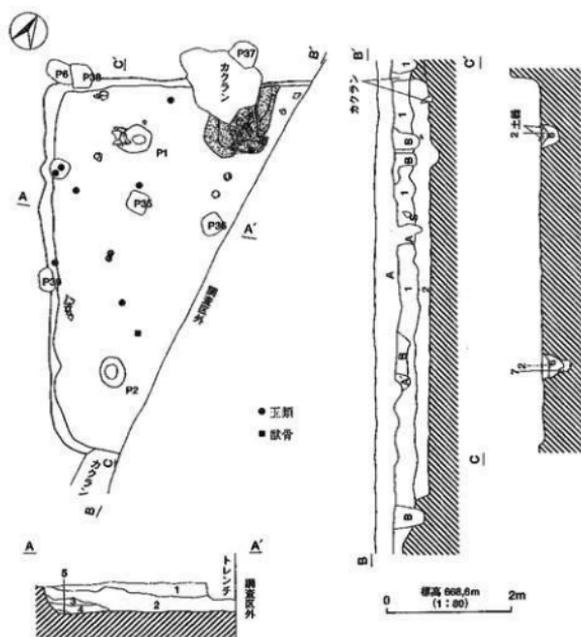
ピットはP1～P5の5個が検出された。規模はP1が57×46cm深さ28cm、P2は50×40cm深さ46cm、P3は径51cm深さ61cm、P4は径48cm深さ17cm、P5は83×60cm深さ10cmを割りP4・P5は床下から検出され、P1・P2は主柱穴である。P3はカマドに隣接し、内部から高坏などが出土していることから貯蔵穴であると思われるが、主柱穴の可能性も否定できない。

カマドは北壁に位置する。袖部の一部と煙道部が攪乱により破壊を受けており状態はやや不良。隣のP3に落ち込むような形で崩落している。カマド周辺は床面が掘り込まれ、そこへ粘土質土を貼った上にカマドが構築されていた。焚口から煙道への長さは不明、幅は88cmを測る。火床面中央には支脚石として円柱状の石が据えられていた。袖部は焚口付近に芯材となる石を組み、そこへ粘性の強い4層の土を被覆して構築されており、袖部内側は火熱によりよく焼けていた。

##### 遺物(第8, 9図、図版七, 八, 十一)

本住居址からの出土遺物は図示した物の他には須恵器坏、土師器坏、甕などの破片が多量に出土した。1は須恵器坏で覆土より口縁から底部にかけて破片での出土。胎土は軟質で焼成も甘く灰白色を帯びる。内外面はロクロナデを施し底部は回転糸切り痕を認める。2は須恵器蓋坏の蓋で覆土から天井部のみが破片で出土。坏身と接する口縁部分とつまみ部分が欠損し、内外面にはロクロナデが見られる。3は須恵器高坏で住居址南西コーナーの床面から脚部のみ出土。脚部にすかしはなく、脚端部は段を成している。内外面にはロクロナデが見られる。

4～13は土師器坏である。4は貼床内より破片での出土。内縁にわずかであるが稜を有し口縁が直立するもので外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが見られる。5～8は内縁に稜を有し口縁を外反させるもので6～8は5と比して外反の度合いが大きい。5は住居址南側の床より破片での出土。外面は体部に横方向のヘラケズリ、内面は黒色処理されておりミガキが施される。6は住居址南側の貼床内より出土し2分の1が残存する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面はヘラケズリ。内面の調整は器体表面の摩耗が激しく判然とはしなかった。7は住居址南側床上と貼床内より破片で出土した資料が接合したもので2分の1が残存する。口縁部は内外面とも強いヨコナデ、体部は内外面ともヘラケズリが見られる。8は住居址南側の床より破片での出土。口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面の体部はヘラケズリ、内面体部は暗文状のミガキが見られる。9は球体の一部を切り取ったような形状を示し、器高が比較的浅く、口縁はわずかに内湾する。住居址南側の貼床内より破片で出土。外面は体部の下方にヘラケズリが見られ、その上から口縁にかけてはミガキが施される。内面は口縁部はヨコナデ、体部にはミガキが施され、放射状の暗文が見られる。10～13は外面の口縁と体部との境に稜を有し、須恵器坏を模倣するものである。10～12は口縁が稜から直立するもので13はわずかに口縁が外反する。10は住居址中央カマドの北側の床より完形で出土。口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面の稜より下の体部はヘラケズリを施し、内面にはヘラナデが見られる。11は覆土より破片での出



#### H1土層

- |    |                     |                                     |
|----|---------------------|-------------------------------------|
| A  | 褐灰色土 (10y r 5/1)    | 近代の耕作土で、しまり、粘性弱い。                   |
| A' | 褐灰色土 (10y r 5/1)    | 耕作土。黒色土ブロックが混入する。                   |
| B  | 暗褐色土 (10y r 3/3)    | 焼土、炭化物を含む。しまり粘性弱い。ピット覆土。            |
| 1  | にぶい黄褐色土 (10y r 5/3) | 焼土、炭化物粒子を微量に含む。しまりあり粘性弱い。           |
| 2  | 暗褐色土 (10y r 3/4)    | 砂質化したシルト質土層。焼土粒子、炭化物を微量に含む。しまり粘性あり。 |
| 3  | 暗褐色土 (10y r 3/4)    | 2層に似るが、色調がやや暗い。                     |
| 4  | 黒褐色土 (10y r 3/1)    | 焼土粒子を微量に含む。しまりあり粘性弱い。               |
| 5  | 黄褐色土 (10y r 5/8)    | 地山互層のシルト質土が崩壊したもの。                  |
| 6  | 黒褐色土 (10y r 2/2)    | 炭化物を微量に含む。しまり粘性あり。                  |
| 7  | 黒褐色土 (10y r 2/2)    | 炭化物を微量に含む。小礫を多く含む。しまりあり粘性弱い。        |

第5図 H1号住居址実測図

土。外面は口縁部ヨコナデ体部はヘラケズリ、内面は口縁部から体部にかけてヨコナデで体部の下方にヘラナダが残る。12はカマド内より破片での出土。稜線はあまり明確ではなく、胎土は砂粒を多く含む粗雑。内外面とも口縁部ヨコナデ、外面体部はヘラケズリを施す。内面の調整は摩耗と胎土の荒さのため判然としない。13は覆土より口縁部の破片のみの出土。口縁部は内外面ともにヨコナデ、わずかに残った体部は外面にヘラケズリを施し、内面は摩耗でわずかしか見えませんがミガキが認められる。

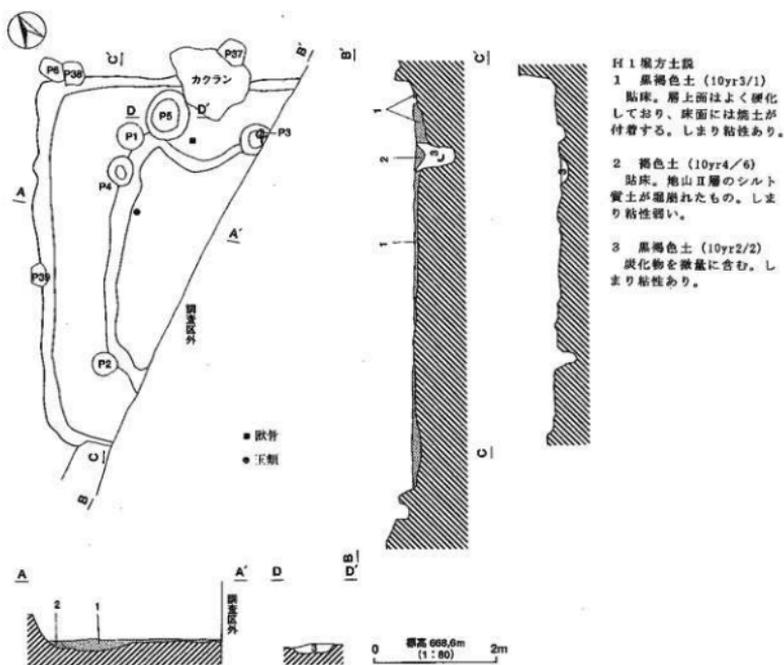
14～28は土師器甕である。そのほとんどが破片での出土であるが、多くの個体を確認した。14は口縁から体部にかけて3分の1ほどを残し出土。胴部は球状に近い形で張り、口縁はやや外反する。口縁部は内外面とも強いヨコナデ、体部は外面に縦方向のハケメ、内面にも横方向のハケメが認められる。15は口縁から体部にかけて2分の1が残存し、カマド脇より出土。胴部は緩やかに張り出し口縁

の立ち上がりはあまり外反しない。口縁部は外面にヨコナデ、内面に横方向のハケメが見られ、外面の口頸基部に沿って指圧痕が施される。体部は外面に横方向のヘラケズリ、内面は縦方向、横方向のヘラケズリが認められる。16は覆土内から破片で出土。口縁部は内外面ヘラナデ、体部は内外面ともに横方向のヘラケズリ。17-21は口縁部が最大径となり胴部の張りが少ないもの。17-20はカマド内より破片での出土。17は口縁部に内外面ヨコナデ、口頸基部に下から縦方向のヘラケズリを施し体部は外部に横方向のヘラケズリ、内部は縦方向、横方向のヘラケズリが見られる。18は口縁部に内外面ヨコナデ、体部外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデを施す。19は口縁部に内外面ヨコナデ、体部外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向と縦方向のヘラナデ。20は口縁部に内外面とも強いヨコナデ、体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面は横方向の単位の大きなヘラナデ。21はP1内から破片で出土。口縁部は内外面ヨコナデ、体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に縦方向のヘラナデを施す。22-24は長期の壺の口縁部と思われ、口縁は体部から「く」の字型に外反する。22はカマド脇より破片での出土。外反する口縁の端部が少し内湾する。内外面とも口縁部はヨコナデだが、口縁外面は一度ヨコナデを行った後口縁部中程に斜め方向のヘラケズリを施し、再び口頸基部付近にだけヨコナデを施している。体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケメ。23は住居址南側の床より破片で出土。口縁部は厚く、内外面にヨコナデを施す。体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のハケメ。24は住居址南側の壁際で破片での出土。口縁部は厚く、内外面ヨコナデ、体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデ。25-28は土師器壺の底部。25はP1内より破片で出土。26、27はいずれもカマド堀り方からの出土。いずれも調整は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部はヘラケズリだが、26、27はヘラケズリ後ヘラナデを施している。28はカマドより底部と体部の一部のみ出土。大型の壺の底部と思われる。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施し、底部はヘラケズリ。29-32は小型の土師器壺。29は体部上方に最大径を持ち、口縁はやや外反する。カマドや貼り床から出土した破片を接合し、口縁部の2分の1が出土した。外面は口縁から体部にハケメが施され、体部の下方には縦方向のヘラケズリも見られる。内面は口縁をヨコナデ、体部はヘラナデを施す。30-32は口縁に最大径を持ち、体部に張りを持たない。特に31、32は器形の外反が大きいもの。30はカマド脇のP3の内面より口縁部の3分2を残し出土。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は外面に横方向のヘラケズリ、内面は口頸基部に横方向のヘラケズリを残し横方向のヘラナデ。31はカマドより破片で出土。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。32は住居址南側の貼床より破片で出土。口縁部に内外面ともヘラケズリ、体部に外面は縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のヘラケズリの後ヘラナデが施される。33、34は土師器の壺である。33はP1の際の床面で出土した口縁から胴部にかけての部分と、周囲の床上で出土した破片が接合され底部をのぞきほぼ完形の状態を残す。体部の中央に最大径を持ち肩が張り、口縁はわずかに外反して直立する。調整は口縁部を内外面ともにヨコナデ、体部外面はその後縦方向に細かいヘラケズリを施し、体部内面は横方向のハケメである。34は住居址北西コーナーから胴部のみ出土。少し残る口縁部はヨコナデが見られ、体部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリを施し体部上面にはハケメが残る。

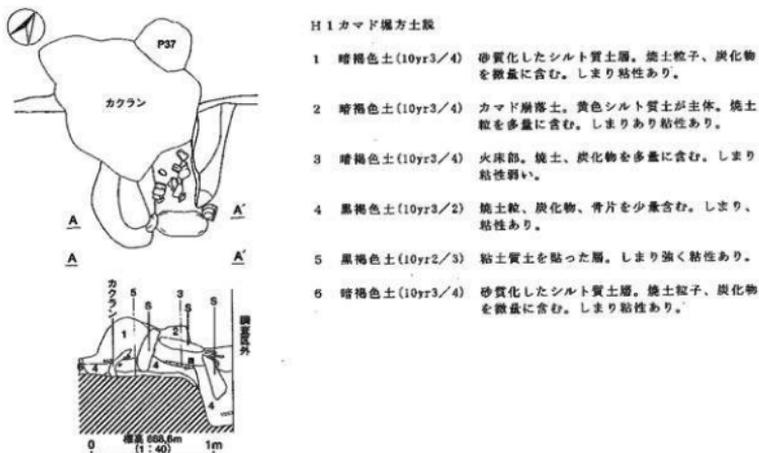
35、36は土師器壺である。35はカマドの南側床上で出土しほぼ完形である。器形は多少歪んでおり体部は口縁付近で緩やかに内湾、高台を有する。調整は外面に横方向のヘラケズリ、内面は赤彩が施され縦方向と横方向のヘラケズリを認めた。また口縁には指圧痕が残る、高台の周辺にも指圧痕が認められることから、口縁、高台の成形、調整が指で行われたことを示す。36は住居址南西コーナーで3分の2が残存して出土。体部は球体を切ったような形状を持ち口縁は歪んでいる。調整は外面に横方向のヘラケズリ、内面には横方向のハケメが見られ赤彩が施されている。底部はヘラケズリ。これら2点とは本住居址の遺物の中でも特異な遺物であり、その使用法に何らかの儀礼的な目的を想起させるものである。37は土師器高坏でP3より完形で出土。坏部分は本住居址遺物7の内面に稜を有し口縁を外反させる坏に類似し、脚部は短く脚端部ではほぼ水平に広がる。調整は口縁部は内外面ともにヨコナデ。坏身の体部は外面ヘラケズリ、内面は摩耗が激しく判然としない。脚部の外部は上半部にヘラケズリが残る、下半部から脚端部にかけてはヨコナデ、内部はヘラナデ、脚端部はヨコナデ。

38は軽石製の砥石。覆土内より出土。

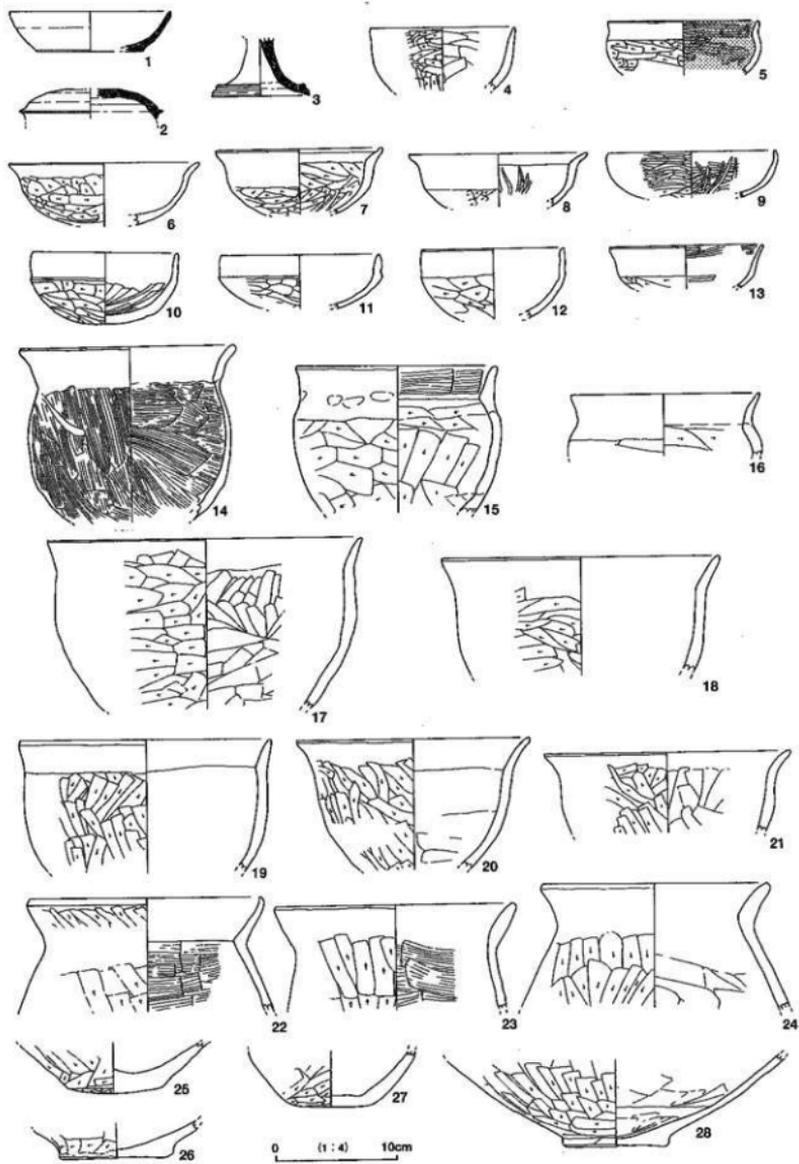
39-50は玉類。管玉が9点で滑石製白玉が2点。50は土玉でカマドより出土した。なお、カマド内より獣骨が出土しており、群馬県立大間々高校教諭宮崎重雄氏に鑑定を依頼した結果、イノシシの肩胛骨に当たる部分であるとのこと教授を賜った。



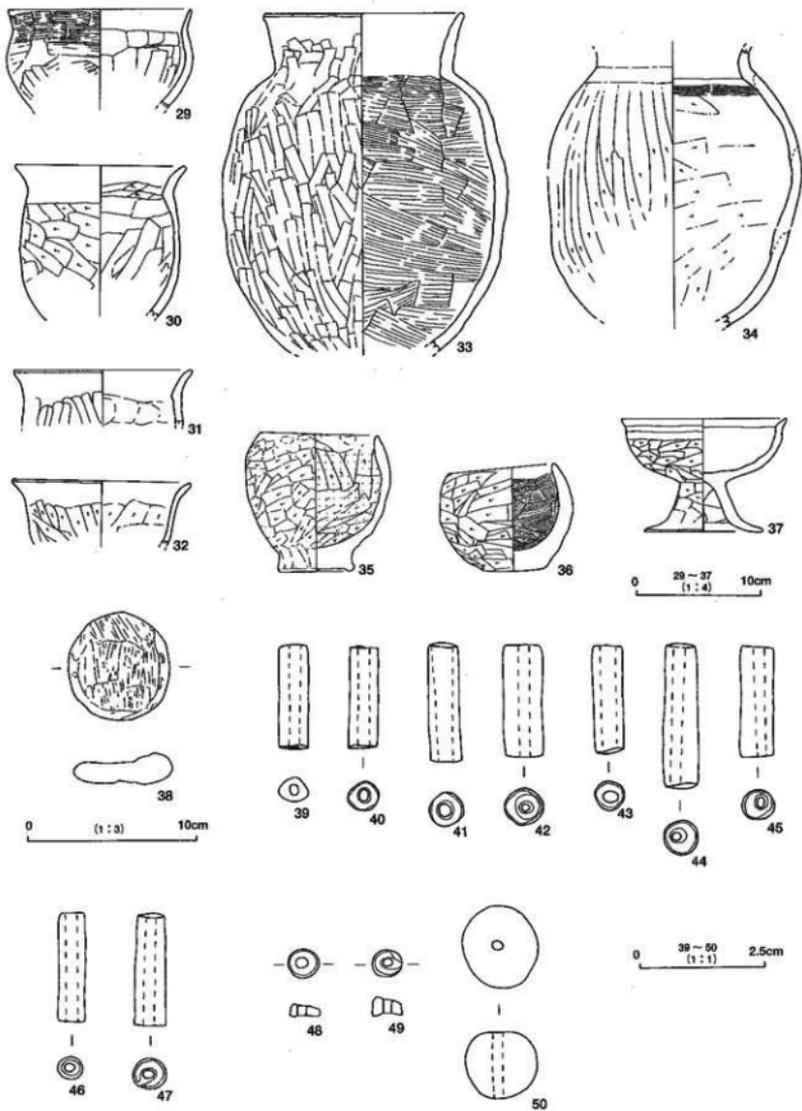
第6図 H1号住居址実測図 (2)



第7図 H1号住居址カマド実測図



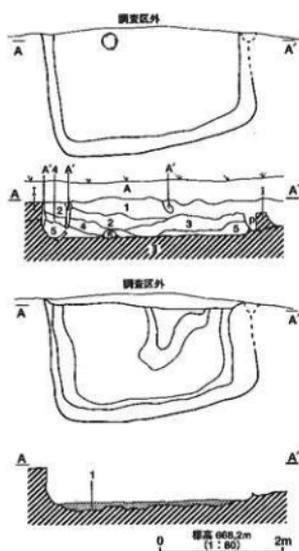
第8圖 H1号住居址出土遺物実測圖(1)



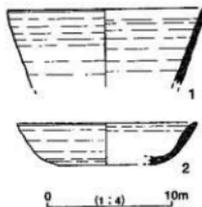
第9圖 H1号住居址出土遺物実測圖(2)

## 2) 第2号住居址

遺構 (第10図、図版三)



第10図 H2号住居址実測図



第11図 H2号住居址遺物実測図 (1)

## 3) 第3号住居址

遺構 (第12図、図版三)

本住居址は調査区西南部、か-7グリッドに位置し、全体層序第Ⅱ層上面から検出された。重複関係は西側にT a 2が切り合っており、新旧関係ではT a 2の方が新しい。住居址南側は調査区外のため未調査である。遺構上部が削平されており壁は確認できず床面のみを検出である。ピット・カマド

## H 2 土説

A層 褐灰色土 (10yr6/1) 耕作土。  
A'層 木の柱の擾乱

I 黒褐色土 (10yr3/1) 堆土。シルト質土。しまり弱く粘性あり。  
II 黄褐色土 (10yr5/6) 堆土。シルト質土。しまり弱く粘性あり。

1 灰黄褐色土 (10yr4/2) φ1~2mmの小礫を多く含み、灰土、炭化物粒を少量含む。しまり粘性あり。  
2 暗褐色土 (10yr3/3) 白色の粒子を少量含む。  
3 暗褐色土 (10yr3/3) 2層に似るが、白色粒子が少なく、しまりが強い。  
4 黒褐色土 (10yr2/3) 深層の赤色粒子を含む。しまりあり粘性弱い。  
5 褐灰色土 (10yr4/1) シルト質土。微量の炭化物を含む。しまり粘性弱い。

## H 2 掘方土説

1 褐色土 (10yr4/6) 陥床部分。黄色シルトブロックと、黒褐色シルトブロックの混合土。上面はよく硬化しているが、下面は柔らかい。

本住居址は調査区東部、い・う-2・3グリッドに位置し、全体層序第Ⅱ層から検出された。重複関係は確認されなかった。住居址北側は調査区外のため未調査であるが、形態はほぼ方形と思われる、規模は南壁長320cm東壁長136cm(検出部)西壁長197cm(検出部)を測り得るのみである。残存する南壁による長軸方向はN-70°-Eを示す。確認面からの壁高は南壁中央で41~51cmを測り、壁溝は検出されていない。カマド、ピットともに確認されなかった。

覆土は5層に分割され自然堆積の様相を示し、1層と5層で炭化物の粒子を確認した。床は中央部東側の一部を除いて最高8cmほど掘り下げ第6層を埋め戻し貼り床を作っている。床面はよく硬質化しているが層下方は軟弱だった。

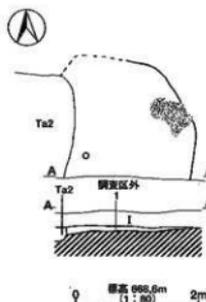
## 遺物 (第11図、図版八)

本住居址からの出土遺物は図示した物の他には土師器埴、甕、須恵器埴、壺などがある。1、2は須恵器埴で覆土中から出土した。1は口縁部から体部のみの出土で調整は内外面ロクロヨコナデ。2も口縁部から体部のみの出土。内外面ともにロクロヨコナデを施す。

も確認されず、遺構の形態、規模等は判然としない。覆土は掘り方の覆土である1層のみが確認できた。床面は非常によく焼けて焼土が貼り付いており硬質化していた。

#### 遺物 (第13図、図版八)

本住居址からの出土遺物は図示した物の他には、土師器甕などがあり点数は少ない。1は土師器の甕で、口縁部のみ出土である。外面はヨコナデが施されるが部分的にヨコナデより前に施された縦方向のハケマが残る。口頸の基部側には一部に縦方向下からのヘラケズリが見られる。内面には横方向のハケマが口辺部全体に施されている。ごく一部残る内面胴部にはヘラケズリの後ミガキ調整がされていた。



第12図 H3号住居址実測図

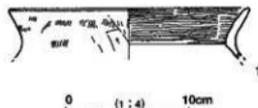
#### H3土器

I 暗褐色土 (10yr3/4)

耕作土。小礫を含み、焼土、炭化物ブロックをわずかに含む。しまり粘性あり。

1 暗褐色土 (10yr3/3)

小礫を含み、焼土、炭化物ブロックを含む。しまり粘性あり。



第13図 H3号住居址出土遺物実測図

#### 4) 第4号住居址

##### 遺構 (第14, 15図、図版三)

本住居址は調査区やや東寄りの中央、え・お-4・5グリッドに位置し、全体層序第Ⅱ層から検出された。重複関係は第2号構列のP2がちょうど東壁のカマド煙道部と切り合い、覆土中で第2号構列P1と単独ピットP24が重複していた。新旧関係はこれらピットの方が新しい。形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁長309cm、南壁長304cm、東壁長282cm、西壁長298cmを測りカマドを中心とした主軸方向はN-64°-Eを示す。確認面からの壁高は北壁中央で31cmを測り、壁溝は確認されなかった。

覆土は7層に分割された。1層が主体を占め、西壁際に6・7層が認められる。4・5層はカマドの関連層である。床面は全体層序第V層まで掘り下げた後、8層を埋め戻して構築されており平坦だが脆弱である。

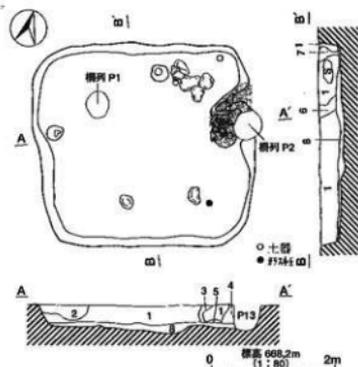
ピットは床下から1個検出され、径24cm 深さ10cmでやや方形を呈する。

カマドは東壁ほぼ中央に位置する。煙道部を第2号構列のP2によって切られ、袖部も北側の片方だけしか残存しておらず状態は不良。焚き口から煙道への長さは不明、幅はおおよそ92cmを測る。袖部はしまりのある黒褐色土によって構築されており、芯材は認められない。残存する袖部に構築材と思われる石材が残っていた。袖部側面は火床面と同様火熱を受けて焼けており、火床面には同じく火熱を受けて焼けている石材と土器が確認されている。

##### 遺物 (第16図、図版九、十一)

本住居址からの出土遺物は、図示した物の他には須恵器坏、甕、土師器坏、甕などがある。1は須恵器坏で住居址北西より底部の破片のみの出土。底部は回転ヘラ切り。2～5は土師器甕。2は覆土より口縁から体部の一部のみ出土。口縁部を内外面ともにヨコナデ、外面は体部を縦方向にヘラケズリ、内面には縦方向のヘラナデが見える。3も口縁から体部にかけての一部分のみでカマド内より出土。断面は薄く成形されており口縁は内外面ともにヨコナデで外面には輪積み痕が微かに見られる。体部は外面に横方向及び縦方向のヘラケズリ、内部はヘラナデを施す。4は覆土から口縁と体部の一部を

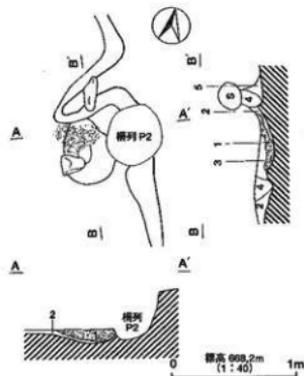
残し底部を欠損して出土。内外面とも口縁部はヨコナデ、体部は外面に横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。5は土師器甕の底部で覆土より出土。外面に横方向のヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部にはヘラケズリを施している。6は台付甕の底部である。覆土から出土し調整は外面はヘラケズリで高台との接合部分にヨコナデを施す。内面はヘラケズリ。7は土師器甌である。底部のみ住居址北東の貼床内からの出土で調整は外面に縦方向と横方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデを施す。底部はヘラケズリ、さらに外側から内部中央に集まるようにして9個の穴が開けられている。8は土師器小型甕で住居址北東コーナーから完形で出土。口縁部は内外面ヨコナデ、外面はヘラケズリで調整され底部はヘラケズリで緩やかな丸みを帯びる。内面は黒色処理されており横方向のミガキ調整、底部から放射状に暗文が施されている。9～10は玉類。9はガラス小玉で住居址北東部床から出土。10は滑石製の白玉で堀り方から出土している。



#### H4土説

- 1 黒褐色土 (10yr2/3) φ1~2mm大バミス、少量の焼土、炭化物ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 (10yr3/4) φ1~2mm大バミス、焼土、炭化物ブロックを少し含む。シルト質土。
- 3 暗褐色土 (10yr3/4) 焼土、炭化物ブロックを含む。多数の焼土ブロックを含み、焼成を受けている。
- 4 暗褐色土 (10yr3/3) 焼土、炭化物ブロックを少量含む。
- 5 褐色土 (10yr4/4) 焼土、炭化物ブロックを含む。黄褐色のシルト質土 (10yr5/6) を多く含む。しまり弱い。
- 6 暗褐色土 (10yr3/4)
- 7 黒褐色土 (10yr2/3)
- 8 暗褐色土 (10yr3/3)

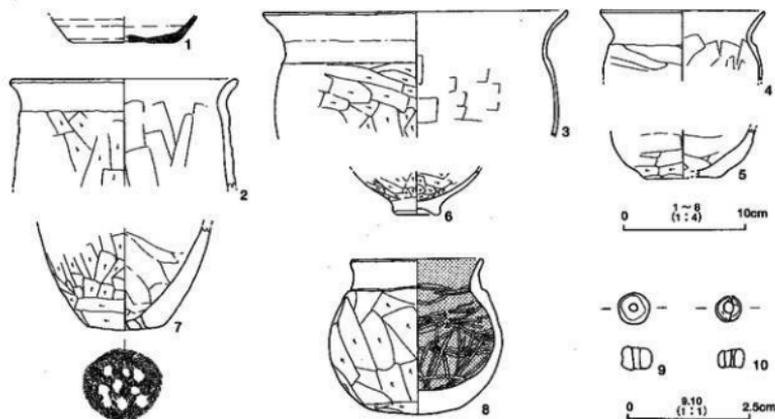
第14図 H4号住居址実測図



#### H4カマド土説

- 1 暗褐色土 (7.5yr3/3) カマド火床部。焼土を多量に含む。黒褐色土 (10yr2/3) ロームブロックが混入する。しまり弱く粘性ややあり。地山の黄褐色シルト質土 (10yr5/6) を多量に含む。しまり弱く粘性なし。シルト質土を多量に含む。しまり粘性弱い。
- 2 暗褐色土 (10yr3/3)
- 3 褐色土 (10yr4/4)
- 4 黒褐色土 (10yr2/3) 捨部分。しまりややあり。
- 5 黒褐色土 (10yr2/3) φ1~2mm大バミスを含み、焼土ブロックを少量含む。

第15図 H4号住居址カマド実測図



第16図 H4号住居址出土遺物実測図

## 第2節 竪穴状遺構

### 1) 第1号竪穴状遺構址

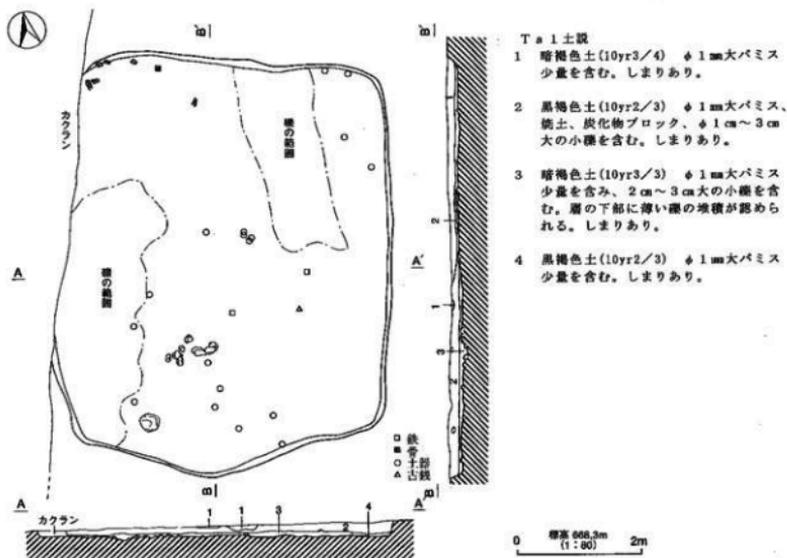
#### 遺構 (第17図、図版四)

本遺構は調査区西側、き・く-5・6・7グリッドに位置し、全体層序Ⅲ層上面から検出された。他の遺構との重複関係は認められないが本遺構東壁と西壁の一部を攪乱によって破壊され、遺構の上面は削平を受けており検出状況は不良だった。カマド、ピットなどは確認されていない。形態は南北に長い長方形だが、南壁が中央でやや突出してちょうど五角形のような形状を呈している。規模は北壁長338cm(検出部)、南壁長472cm、西壁長619cmを計測し得るのみである。長軸方向はN-11°-Eを示した。確認面からの壁高は東南コーナーで10cmを測る。壁漆は発見されなかった。

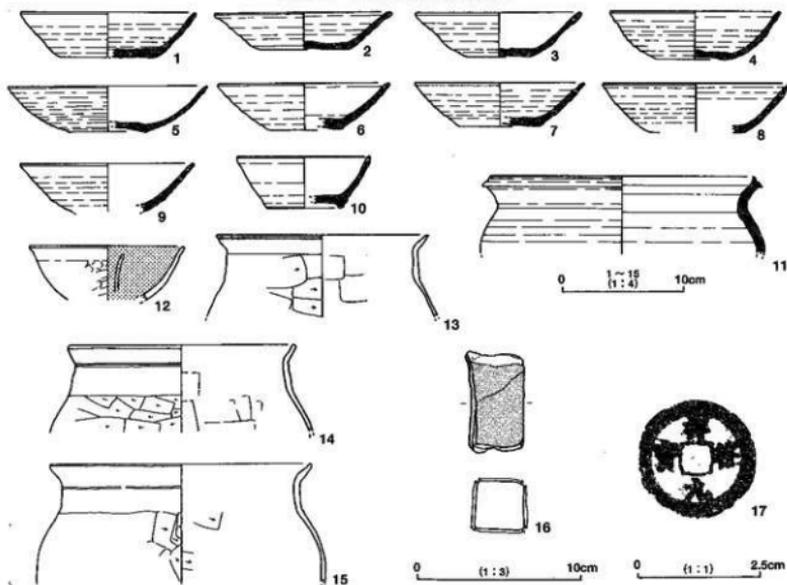
覆土は4層に分割できるが主体となるのは1層である。2層は住居の北側でのみ認められた。床面は最高で8cmほど掘り下げられており遺構中央部で一部比較的確りとした貼床を確認したが、全体では確認できない箇所もありはつきりしない。また、遺構西側と遺構北東では床面に礫が広がった部分が認められ、その上から獣骨や焼土の塊が見つまっている。

#### 遺物 (第18, 19図、図版九, 十一)

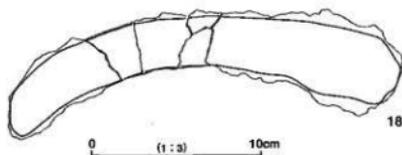
本遺構からの出土遺物は、図示した物の他に須恵器杯、甕、土師器杯、甕などがある。1~9は須恵器杯である。1は覆土より3分の1のみ出土で底部は右回転糸切り。2は遺構中央の床より3分の1のみ出土。底部は右回転糸切り。3は覆土より4分の1のみ出土。底部は右回転糸切り。4は覆土から3分の2のみの出土。底部は右回転糸切り。5は遺構西側の礎の広がる範囲の上より3分の1の出土。底部は右回転糸切りで内面に二次焼成の痕跡が見られる。6は覆土より口縁から体部にかけての破片のみで出土。底部は右回転糸切り。7は遺構北東コーナー付近より口縁から体部にかけての破片のみで出土。底部は右回転糸切り。8、9は覆土より口縁から体部にかけての破片のみで出土。10は高台を有する須恵器杯である。高台と体部の間に明確な差がなくヘラケズリのされないタイプの物で底部の調整は回転糸切り後ヘラナデを施し高台を付した物である。これらの須恵器杯のうち1、2、8、10は焼成が甘く橙色、4は灰白色を帯びる。1~4、8にはそれぞれ火漆が認められた。11は須恵器甕で覆土より口縁付近の破片のみの出土。内外面ともに強いヨコナデで調整されている。12は土師器杯で覆土中より口縁から体部にかけての破片での出土である。口縁部は内外面ともにヨコナデを認め、外面の体部はヘラケズリ、内部は黒色処理され放射状の暗文が施される。13~15は土師器甕で



第17図 T a 1号堅穴状遺構実測図



第18図 T a 1号堅穴状遺構遺物実測図



第19図 Ta1号堅穴状遺構出土遺物実測図(2)

の大中祥符年間(1008)に鑄造された祥符元寶で、銭文は摩耗しており鮮明ではない。なお、本遺跡と同じ微高地上に立地する市道遺跡の第6号住居址内よりこれと同時期に鑄造された祥符通寶が発見されている。18は鉄製品で鎌である。鉄分が表面に滲出し大量に付着している。このほか鉄滓が1点覆土中より出土しているが詳細は付表を参照されたい。獣骨は遺構北西の壁付近と西側の礎の広がる部分の上で焼けた状態で出土している。動物の種類や部位などは微細な破片であるために明らかにはできなかった。

## 2) 第2号堅穴状遺構址

### 遺構(第20図、図版四)

本遺構は調査区南東、か・きー7グリッドに位置し、基本層序第Ⅲ層上面から検出された。重複関係は東側でH3号住居址と重複し、また西壁でビット33と重複する。新旧関係ではH3号住居址は本住居址より古く、ビット33は本住居址より新しい。住居址南側は調査区外のため未調査である。形態はほぼ方形と考えられ、規模は北壁長468cm、東壁長159cm(検出部)、西壁長163cm(検出部)を計測し得るのみである。残存する北壁による長軸方向は $N-87^{\circ}-E$ を示す。確認面からの壁高は北壁で16cmを測る。また本住居址は壁際、特に北東コーナー部分に多くの礫の堆積が認められる。壁溝は確認されなかった。

ビットは1基検出された。P1は床下から検出され径38cm深さ40cmを測る。

覆土は2層の単層で確認され焼土、炭化物を含む。床は最高で約4cmほどの貼床が施されていたが、やや軟質だった。また北東コーナーには流れ込みと思われる焼土塊が確認されている。

### 遺物(第21図、図版九、十一)

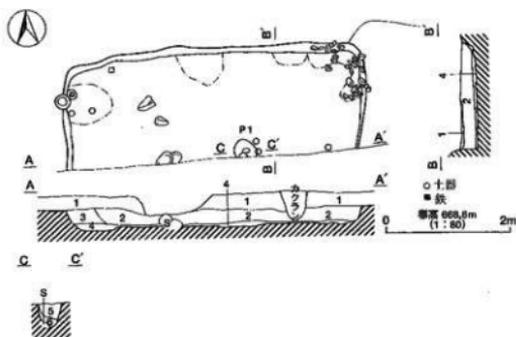
本遺跡からの出土遺物は、図示できた物の他にはほとんど見られない。1は土師器鉢で2分の1が残存する。椀を有し、体部は丸みを帯び球体を切ったような形状を持ち、口縁が外に向かって直向するもの。外部にわずかながら赤彩された痕跡が残り、調整は外面は口縁、体部にヘラケズリ、内部にミガキを施す。

2は須恵器坏で完形である。内外面はロクロナデ調整が施され底部は右回転糸切りが見られる。1、2は隣接して本遺構南西壁際から出土している。

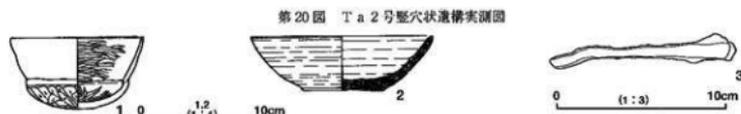
3は鉄製品で釘。遺構北西コーナー付近で出土。表面に鉄分が滲出し大量に付着している。そのほかに青磁の破片が1点覆土より出土している。微少な破片であるため詳細は明らかではない。青磁については巻頭図版を参照されたい。

口縁から体部にかけて破片で覆土からの出土。いずれも口縁部は内外面ともヨコナデ、外面に横方向へのラケズリ、内面にはナデが施される。これらの装はいわゆる「武藏甕」と呼ばれる薄手の甕である。16は砥石。

17は古銭で遺構中央の比較的狀態のよい床より出土した。宗代

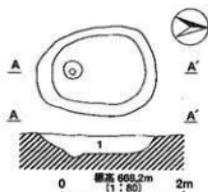


- Ta 2 土版
- 1 暗褐色土(10yr3/4) 小礫を含み、炭化物、焼土ブロックをわずかに含む。しまり粘性あり。
  - 2 黒褐色土(10yr2/3) 小礫を含み、炭化物、焼土ブロックを少し含む。上層の暗褐色土(10yr3/4)のブロックが混入する。しまり粘性あり。
  - 3 暗褐色土(10yr3/3) 小礫、炭化物をわずかに含む。しまり粘性あり。
  - 4 黒褐色土(10yr2/3) パミス少量を含む。
  - 5 黒褐色土(10yr2/2) 小礫、炭化物を含む。しまりあり。
  - 6 黒褐色土(10yr2/2) 小礫を少量含む。



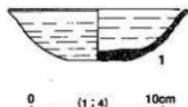
第21図 Ta 2号壑穴状遺構出土遺物実測図

### 第3節 土坑



- D1 土版
- 1 黄褐色土(10yr4/6) 下面は高質化している。微量の炭化物を含む。しまり粘性弱い。

第22図 D1号土坑実測図



第23図 D1号土坑出土遺物実測図

#### 1) 第1号土坑

##### 遺構 (第22図、図版四)

本遺構は調査区北東、う-2・3グリッドに位置し、全体層序第II層において検出された。重複関係にある遺構は存在しない。形態は楕円形、規模は長軸長97cm、短軸長75cmを測る。長軸方向はN-4°-Wを示す。確認面からの深さは16cmを測った。断面形は逆台形で底部は平坦。底部中央南寄りに深さ7cmほどの小ビット状の落ち込みがあったが、柱痕等は認められず、用途は不明である。

覆土は単層で微量の炭化物を含む。下面は硬質化していた。

##### 遺物 (第23図、図版九)

1は須恵器片で6分の1のみ残存している。内外面ともにロクロナデ調整、底部には右回転糸切痕が見られる。

#### 2) 第2号土坑

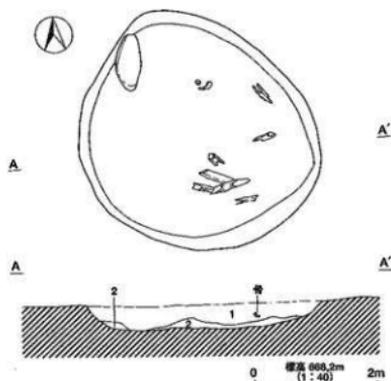
##### 遺構 (第24図、図版四)

本遺構は調査区中央部、え-3・4グリッドに位置し、全体層序第II層から検出された。重複関係にある遺構は存在しない。形態は円形を呈し、規模は長軸長103cm、短軸長92cmを測る。長軸方向はN-25°-Wを示す。

確認面からの深さは11cmを測った。断面形は逆台形で底部は平坦である。

覆土は2層に分割できた。主体となるのは1層で炭化物、焼土粒子が認められた。2層は底部近く

で確認されシルト質土を含んでいる。本遺構からは人骨が出土しており土坑墓であると思われる。



D 2 土坑

- 1 黒褐色土(10yr2/3) 黒色のシルト質土を多数に含み、炭化物、焼土粒子を微量に含む。
- 2 暗褐色土(10yr3/3) 褐色のシルト質土を少量含み、砂質土を微量に含む。

第24図 D2号土坑実測図

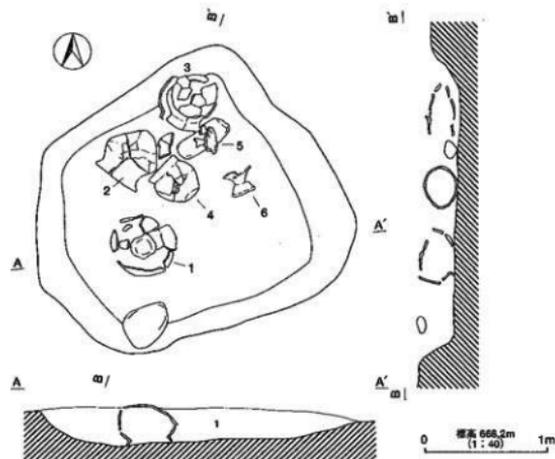
遺物

本遺構では人骨の他に図示できる遺物はなく、少量の土師器、須恵器の破片が見られるのみである。人骨についての詳細は第V章第2節「宮浜遺跡から出土した人骨について」を参照されたい。

3) 第3号土坑

遺構 (第25図、図版五)

本遺構は調査区南西、い-6グリッドに位置し、全体層序第II層から6検出された。重複関係にある遺構は存在しない。形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸長126cm、短軸長113cmを測る。長軸方向はN-62°-Eを示す。確認面からの深さは21cmを測った。断面形は逆台形で底部は平坦である。覆土は単層で炭化物粒子を含んでいる。



D 3 土坑

- 1 暗褐色土(10yr3/3) 炭化物を微量に含む。しまり弱く粘性あり。

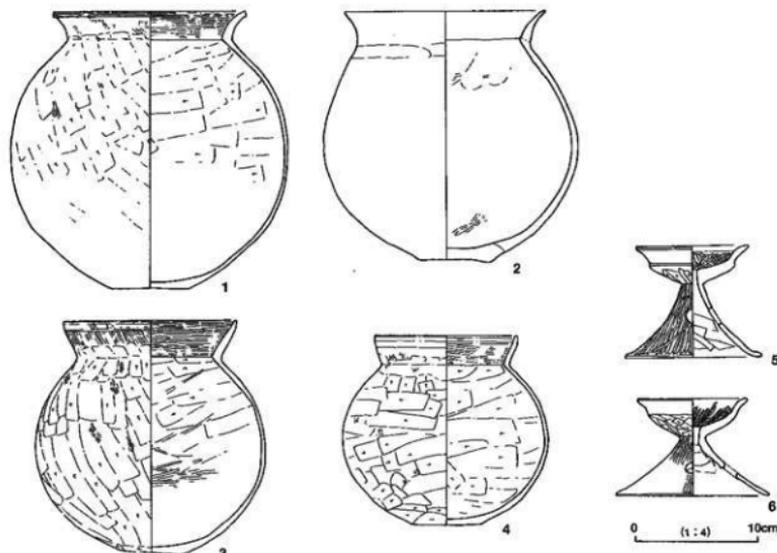
第25図 D3号土坑実測図

遺物 (第26図、図版十)

1~4は土師器蓋である。すべてほぼ完形の状態で出土した。いずれも体部は球形に近い形で丸く張り出し、口縁はくの字型に外反する形の蓋で、断面は薄く作られている。1は底部が上になった状態で出土した。調整は口縁部で内外面ヨコナデ、内面はハケメが残る。体部は外面に縦方向のヘラケズリで、内面は横方向のヘラナデを施す。口縁部、体部には所々にヨコナデ、ヘラケズリ調整の以前に行われたハケメの痕跡が残る。口縁端部は外反し面取りが施され横方向のハケメが認められた。底部はヘラケズリ。2は土坑の北側より横に

倒れた状態で出土。調整は口縁部に内外面ともにヨコナデ、外面の口頭基部には横方向の強いナデが認められる。体部は二次焼成を受け調整は判然としない。内面では一部にミガキが残リナデの後ミガキが施されたと思われる。底部はヘラケズリ。3は土坑北側の壁際に横に倒れた状態で出土。調整は

口縁部で外面ヨコナデ、内面にはハケメが残り荒いミガキが施される。外面にもヨコナデ以前に施された縦方向のハケメ痕が見られる。口頸基部に下からのヘラケズリが残る。体部は外面にヘラケズリが施され、所々にわずかにハケメが残る。内面はミガキが残り、ヘラケズリ後に荒いミガキが施されたと思われる。底部はヘラケズリで径が小さく安定が悪い。4は土坑中央で横に倒れた状態で出土。比較的小型の壺で、調整は口縁部の内外面にヨコナデを施し、外面にはその前に施された縦方向のハケメが残る。内面にはハケメが残る。体部は外面に横方向のヘラケズリで、口頸基部に下から縦方向に向かってのヘラケズリが残る。内面は横方向のヘラケズリが行われる。底部はヘラケズリで径は小さい。これらの壺類の表面には、いずれも火熱を受けた痕跡を認め摩耗が激しい。5、6は土師器器台である。どちらも脚が大きくラップ状に広がり3個のすかし孔を有し、坏身は外面の稜から口縁が強く外反している。5は土坑床上で確認した大型の礫の上に横になった状態で、坏身と脚端部の一部を欠損して出土。調整は坏身で口縁部は内外面ヨコナデ、稜より下の体部は外面ヘラケズリ、内面は中央から放射状にミガキが施される。脚部は外面に縦方向のミガキ、内面には横方向のヘラナデが見られる。脚部に火熱の痕あり。6は土坑内やや東寄りの覆土中から脚部の約2分の1を欠損して出土。調整は坏身で口縁部は内外面ヨコナデ、5と比してやや緩やかな稜より下の体部はヘラケズリが施され、内面は放射状にミガキ。脚部は摩耗により一部のみミガキが残る。内面にはヘラナデが見える。



第26図 D3号土坑出土遺物実測図

## 第4節 柵列

### 1) 第1号柵列 (第27図、図版六)

本遺構は調査区東側中央、い〜え-5グリッドにかけて位置し、全体層序第2層から検出された。形態は6基の柱穴が東西方向に展開し、軸の方位はN-87°-Eを示す。規模は東西で10m21cm、柱穴間の寸法は114cm~148cmを測る。柱穴の形態はP1が楕円形、P2、4が隅丸方形、そのほかはほぼ円形を呈する。P4は2基のピットが重複する形で検出され、東側のピットが新旧関係では古い。

規模は最大径でP 5の80cm、最小径でP 3の44cmを測る。深さは18~33cmを測り口径に比べて浅い。覆土は黒褐色土でしまり粘性ともにあり炭化物を微量に含む。柱痕は確認されなかった。

柱穴内からの遺物で図示できる物はない。いずれも土師器の破片。P 2、4~6で確認される。P 2、4で出土した壺の腰部と思われる土師器片は、薄手で外面にヘラケズリが見られいわゆる武藏壺と類似する。

## 2) 第2号構列 (第27図、図版六)

本遺構は調査区東側中央、う、えー4グリッドにかけて位置し、全体層序第2層から検出された。形態は4基の柱穴がやや東北東に向かって東西方向に伸び、軸方位はN-79°-Eを示す。規模は東西で6m50cm、柱穴間の寸法は86~201cmを測り、P 3・4間の間隔が他と比べて短い。柱穴の形態はP 4のみが隅丸方形を呈しその他はほぼ円形。規模は最大径でP 2の51cm、最小径でP 3の44cmを測る。深さは24~46cmを測る。覆土は暗褐色土で炭化物、焼土粒子を含む。P 3に粘土ブロックや炭化物を多く含んだ柱痕と思われる層を確認している。

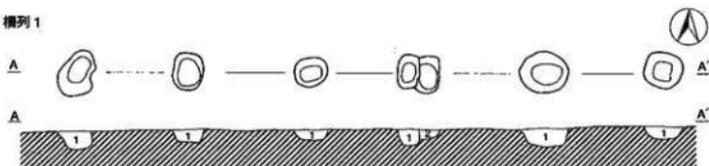
遺構内からの遺物で図示したもの以外ではP 2から土師器坏、壺、P 3から須恵器坏、土師器坏の破片を確認した。1は鉄製品で釘。P 3内より出土した。鉄分が滲出し表面を厚く覆っている。

## 3) 第3号構列 (第27図、図版六)

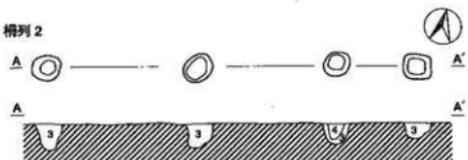
本遺構は調査区東側北寄り、い~えー3グリッドにかけて位置し、全体層序第2層から検出された。形態は5基の柱穴がほぼ東西方向に展開し軸方位はN-84°-Eを示す。規模は東西で8m46cm、柱穴間の寸法は124~162cmを測る。柱穴の形態はP 1~3がテラス状の張り出しを持つ円形、P 4は歪んだ楕円形、P 5は円形を呈する。規模は最大径でP 4の82cm、最小径でP 1の63cmを測る。深さは24~46cmを測り口径に比べて浅い。覆土は黒褐色土でしまり粘性ともにあり炭化物を微量に含む。P 1に柱痕らしき層を確認している。

遺構内からの遺物で図示できる物はなかった。P 3内より須恵器の破片が出土している。

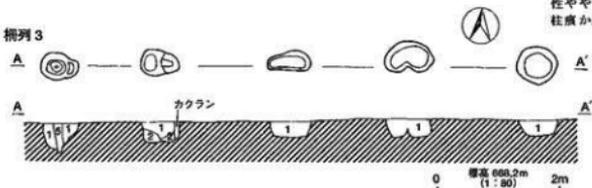
構列 1



構列 2

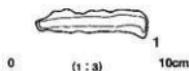


構列 3



### 構列土説

- 1層 黒褐色土(10yr2/2) しまり、粘性あり、炭化物微量含む。
- 2層 褐色土(10yr4/6) しまり、粘性あり、褐色土シルト地山に近い。
- 3層 暗褐色土(10yr3/3) しまりややあり、粘性弱。炭化物、焼土粒子含む。
- 4層 暗褐色土(10yr3/4) しまり、粘性弱。粘土ブロック、炭化物多く含む。柱痕か。
- 5層 にぶい黄褐色(10yr5/4) しまり、粘性やや弱。褐色土シルトを多く含む。柱痕か。

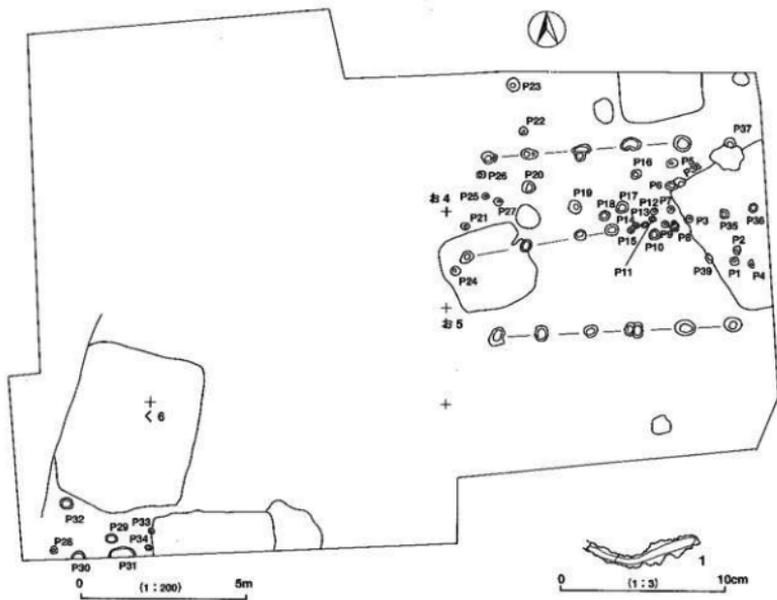


第27図 第1~3号構列実測図

## 第5節 ピット (第28図、図版六)

宮添遺跡では総数で39基のピットが検出された。検出されたピットは住居址と重複関係にあるものが存在するが、いずれも新旧関係ではピットの方が新しい。これらのピットは傾向として調査区東側、特に中央部に集中しており、そのほかでは調査区西南の端でしか確認されない。形態は円形や楕円形、あるいは隅丸方形を呈し、規模は径20~50cm、深さ10~50cmを測るものが主流である。覆土は黒褐色土あるいは暗褐色土で、焼土・炭化物粒を含むものが多く見られた。

各ピットの規模、出土遺物等についてはピット一覧表に記した。遺物で図示できるものはP3より出土した鉄製品1点のみである。P4からは青磁の破片が出土している。青磁については巻頭図版を参照されたい。

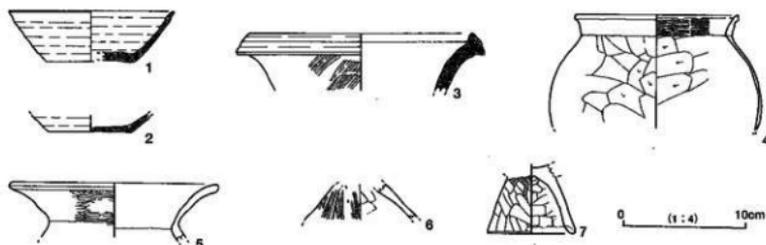


第28図 宮添遺跡ピット実測図

## 第6節 遺構外出土遺物 (第29図、図版十)

1、2は遺構検出時に確認された須恵器坏で4分の1の出土。底部は右回転糸切り。2は底部のみの出土で右回転糸切り。3は遺構検出時に確認された須恵器甕で口縁の破片のみでの出土。外面はヨコナデだがその前に施された平行タタキメが残る。内面はヨコナデである。4は土師器甕でい-5グリッドより口縁から体部の一部分のみ出土。口縁は外面ヨコナデで口頸基部に縦方向のハケメが残る。内面は横方向のハケメ、体部は内外面とも横方向のヘラケズリ。5はH1号住居址を切る掘削の内部より出土した土師器甕の口縁部の破片。口縁の外面はミガキが施され、内面はヨコナデ。6はか-6グリッドから出土した破片が接合した高坏の脚上半部である。外面は縦方向にハケメを施し、内面にはヘラナデが見られる。7は、か-6グリッドから出土した破片が接合した台付甕の脚部である。外

面はヘラナダが施されるが一部塞の体部との接合部分付近にヘラナダの前に行われたハケメが残る。  
内面はヘラナダ。脚部の接地部分を内側に巻き込むように成形している。



第29図 遺構外出土遺物実測図

宮添遺跡住居址一覽表

遺構名	形態	規模 (㎡, cm)					主軸方位	カマド	柱 穴	床の状態	備 考
		面積	北壁	東壁	南壁	西壁					
H 1	(方形)	(13.37)	(415)	—	(82)	604	44	N-32°-W	北	2(3)	全体的に硬質 カマド脇に貯蔵穴
H 2	(方形)	(3.95)	—	(136)	320	(197)	51	N-70°-E	—	—	全体的に硬質
H 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	全体的に硬質
H 4	方形	9.22	309	282	304	298	31	N-64°-E	東	—	全体的に脆弱 床面のみ印土。焼土露出。

竪穴状遺構一覽表

遺構名	形態	規模 (㎡, cm)					主軸方位	柱 穴	床の状態	備 考	
		面積	北壁	東壁	南壁	西壁					深さ
T a 1	方形	(31.85)	(338)	—	472	619	10	N-11°-E	—	—	一部のみ貼床確認 掘孔により一部破壊
T a 2	(方形)	(7.85)	468	(159)	—	(163)	16	N-87°-E	1	やや軟質	北東コーナーに焼土塊

土坑一覽表

遺構名	検出位置	平面形態	規模 (cm)			長軸方位	備 考
			長軸長	短軸長	深さ		
D 1	う-2・3	楕円形	97	75	16	N-4°-W	
D 2	え-3・4	円形	103	92	11	N-25°-W	
D 3	い-6	隅丸方形	126	113	21	N-62°-E	土師器夾4点、器台2点出土。

溝列一覽表

遺構名	検出位置	検出本数	ビット間隔 (cm)	ビット規模		規模 (m)	主軸方位	備 考
				径	深さ			
1	い-え-5	6	114~148	80~44	18~33	10.21	N-87°-E	
2	う-え-4	4	85~201	51~44	24~46	6.50	N-79°-E	鉄製品を出土
3	い-え-3	5	124~162	82~63	24~46	8.46	N-84°-E	

ビット一覽表

No	検出位置	規模 (cm)		覆 土		出土遺物
		径	深さ			
1	い-4	31×28	31	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物・焼土混含。	土師器裏破片出土
2	い-4	31	21	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物・焼土混含。	土師器破片出土
3	い-4	29	38	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物・焼土混含。	土師器破片、鉄製品出土
4	あ-4	33×21	35	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物・焼土混含。	青磁破片出土
5	い-3	42×34	18	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物混含。	
6	い-3	41×36	20	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物混含。	土師器破片出土
7	い-3	29	20	黒褐色土(10Y R 2/3)	黒色シルト多、炭化物混含。	須恵器破片出土

8	い-4	48×33	19	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	土師器破片出土
9	い-4	29	16	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
10	い-4	44×38	14	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
11	い-4	27	18	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
12	い-3	29	11	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
13	い-4	25×22	11	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
14	う-4	26	21	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	
15	う-4	29	18	黒褐色土(10Y R2/3)	黒色シルト多,炭化物微含。	粗形器破片出土
16	う-3	37	25	暗褐色土(10Y R4/3)	炭化物を微量に含む。	土師器破片、須恵器坏出土
17	う-3	49	28	暗褐色土(10Y R4/3)	炭化物を微量に含む。	土師器破片出土
18	う-4	43	26	暗褐色土(10Y R2/3)	炭化物を微量に含む。	
19	う-3	56×44	23	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物、径2-3mmの焼土多含。	土師器破片、須恵器坏出土
20	え-3	54×48	16	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物を微量に含む。	土師器、須恵器破片出土
21	え-4	30	24	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物、焼土を多量に含む。	
22	え-3	33×29	26	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物を含む。	土師器破片出土
23	え-2	51	40	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物、焼土を多く含む。	須恵器、土師器破片出土
24	え-4	34	5	暗褐色土(10Y R3/4)	焼土を微量に含む。	
25	え-3	27×22	9	暗褐色土(10Y R3/4)	焼土を微量に含む。	
26	え-3	29×35	28	暗褐色土(10Y R3/4)	焼土を微量に含む。	
27	え-3	38×32	26	暗褐色土(10Y R3/4)	焼土を微量に含む。	
28	く-7	26	10	暗褐色土(10Y R3/3)		
29	く-7	48×37	14	黒褐色土(10Y R2/2)	炭化物、焼土を微量に含む。	土師器破片出土
30	く-7	48	12	暗褐色土(10Y R3/3)	炭化物、焼土を微量に含む。	
31	く-7	106	18	暗褐色土(10Y R3/3)	炭化物、焼土を微量に含む。	
32	く-7	51×44	11	暗褐色土(10Y R3/3)	炭化物、焼土を微量に含む。	
33	き-7	24	22	黒褐色土(10Y R2/3)		土師器破片出土
34	く-7	24	21	黒褐色土(10Y R2/3)		
35	い-4	33	48	黒褐色土(10Y R2/3)		
36	あ-3	34	48	黒褐色土(10Y R2/3)		
37	い-3	45	45	暗褐色土(10Y R3/4)	炭化物を含む。	
38	い-3	35	43	黒褐色土(10Y R2/3)		
39	い-4	37	32	黒褐色土(10Y R2/3)		

### 宮志遺跡出土遺物観察表

#### H1号住居址:

持持 番号	器種	法量(mm)			胎土 色調	調査 (外面) (内面)	備考
		口径	底径	器高			
8-1	須恵器 坏	13.2	8.6	3.3	2mm以下の赤色粒子少量含む 灰白色 (7.5y r8/2)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	胎土軟質
8-2	須恵器 甕	11.8	-	-	1mm以下の黒色粒子微量含む 灰色 (5y 5/1)	ロクロナデ ロクロナデ	
8-3	須恵器 高坏	-	8.2	-	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (5y 5/1)	ロクロナデ ロクロナデ	脚部のみ出土
8-4	土師器 坏	12.0	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 褐色 (5y r7/6)	坏部ヘラケズリ ヘラケズリ	
8-5	土師器 坏	12.6	-	-	1mm以下の白色粒子含む 褐色 (5y r7/8)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ 内面ミガキ	内面黒色処理
8-6	土師器 坏	15.6	-	-	3mm以下の黒色粒子微量に含む 褐色 (2.5y r7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ 摩耗激しく不明	
8-7	土師器 坏	14.0	-	-	1mm以下の白色粒子微量に含む 淡黄褐色 (7.5y r8/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	二次焼成有り
8-8	土師器 坏	14.8	-	-	3mm以下の白色粒子少量含む 褐色 (2.5y r7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ミガキ	
8-9	土師器 坏	13.8	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 褐色 (5y r6/6)	体部ミガキ・体部下半部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ・体部ミガキ	内面に嘴文を認める
8-10	土師器 坏	12.0	-	6.0	2mm以下の赤色粒子少量含む 褐色 (5y r7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-11	土師器 坏	13.2	-	-	3mm以下の赤色粒子少量含む 灰白色 (10y r8/2)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-12	土師器 坏	11.8	-	-	2mm以下の石英、雲母片多量含む 褐色 (2.5y r7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ	摩耗激しく不明
8-13	土師器 坏	12.6	-	-	1mm以下の白色粒子多量に含む 褐色 (5y r7/8)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ 内面 一部にのみミガキが現る	
8-14	土師器 甕	17.8	-	-	1mm以下の雲母片微量含む 褐色 (7.5y r7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ハケメ ヨコナデ ハケメ	二次焼成有り
8-15	土師器 甕	16.8	-	-	3mm以下の白色粒子少量含む 淡黄褐色 (7.5y r8/6)	口縁部ヨコナデ、口蓋基部に兼匠痕・体部ヘラケズリ 口縁部ハケメ・体部ヘラケズリ	
8-16	土師器 甕	15.6	-	-	1mm以下の白色粒子を含む 淡褐色 (5y r8/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	

種類 番号	器 種	法量 (cm)			胎 土 色 調	調整 (外側) (内側)	備 考
		口径	底径	器高			
8-17	土師器 壺	25.0	-	-	3mm以下の白色粒子を含む 褐色 (7.5y r 7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-18	土師器 壺	23.0	-	-	2mm以下の白色粒子を含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-19	土師器 壺	20.8	-	-	2mm以下の白色粒子を含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-20	土師器 壺	19.4	-	-	2mm以下の白色粒子少量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-21	土師器 壺	20.2	-	-	2mm以下の白色粒子を含む 褐色 (2.5y r 7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-22	土師器 壺	19.0	-	-	5mm以下の粒子を少量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/6)	口縁部ヨコナデ後部ヘラケズリ・体部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ・体部ハケメ	
8-23	土師器 壺	20.0	-	-	3mm以下の白色粒子を含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/3)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ハケメ	二次焼成有り
8-24	土師器 壺	18.8	-	-	3mm以下の白色粒子を少量含む 灰白色 (7.5y r 8/2)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
8-25	土師器 壺	-	7.8	-	5mm以下の赤色粒子を多量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/4)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ヘラケズリ	
8-26	土師器 壺	-	9.4	-	1mm以下の白色粒子を含む 浅黄褐色 (10y r 8/4)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ	
8-27	土師器 壺	-	5.4	-	2mm以下の白色粒子を多量含む 浅黄褐色 (10y r 8/3)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ	二次焼成有り
8-28	土師器 壺	-	8.8	-	2mm以下の白色粒子を多量含む にぶい黄褐色 (10y r 6/4)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ヘラケズリ	二次焼成有り
9-29	土師器 小型壺	14.5	-	-	2mm以下の白色粒子を多量含む 褐色 (5y r 7/6)	口縁部ハケメ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	二次焼成有り
9-30	土師器 小型壺	13.2	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ・口頸部にヘラケズリを残しヘラケズリ	
9-31	土師器 小型壺	14.2	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 褐色 (5y r 7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ・体部ヘラケズリ	
9-32	土師器 小型壺	14.0	-	-	1mm以下の白色粒子微量含む 褐色 (5y r 7/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	
9-33	土師器 壺	15.6	-	-	1mm以下の赤色粒子微量含む 浅黄褐色 (10y r 8/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ハケメ	二次焼成有り
9-34	土師器 壺	-	-	-	1mm以下の白、黒色粒を少量含む 褐色 (5y r 6/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ上部にハケメ残る	
9-35	土師器 壺	9.6	6.4	11.7	1mm以下の白色粒子を多量含む にぶい褐色 (7.5y r 7/4)	口縁部一部に指定量・体部ヘラケズリ・底部指定指定量 口縁部指定量・体部ヘラケズリ	内面赤彩
9-36	土師器 壺	8.5	5.0	8.9	3mm以下の白色粒子を多量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/6)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ハケメ	内面赤彩
9-37	土師器 高坏	13.2	9.6	9.2	1mm以下の白色粒子微量含む 浅黄褐色 (7.5y r 8/4)	坏口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ・潤上平ヘラケズリ・下半ヨコナデ。 坏口縁部ヨコナデ・体部は厚肉により不明・脚部ヘラケズリ・潤上平ヨコナデ	二次焼成有り

## H 2号住居址

11-1	須志器 坏	15.8	-	-	1mm以下の白色粒子を少量含む 灰色 (N5/0)	坏部ロクロナデ ロクロナデ	
11-2	須志器 钵	14.4	7.6	3.5	1mm以下の白色粒子を含む 灰白色 (7.5y 7/1)	坏部ロクロナデ ロクロナデ	大器有り。一部焼成が早くに ぶい褐色 (5y r 6/3) を見す。

## H 3号住居址

13-1	土師器 壺	19.6	-	-	1mm以下の白色粒を含む 淡黄色 (2.5y 8/4)	口縁部ハケメ後ヨコナデ。口頸部に下よりヘラケズリ ハケメ・体部ヘラケズリ後ナゲキ	
------	----------	------	---	---	--------------------------------	---	--

## H 4号住居址

種類 番号	器 種	法量 (cm)			胎 土 色 調	調整 (外側) (内側)	備 考
		口径	底径	器高			
16-1	須志器 坏	-	8.2	-	径1mm以下の黒色粒を含む 灰黄色 (2.5y 7/2)	坏部ロクロナデ・底部回転切り ロクロナデ	
16-2	土師器 壺	18.8	-	-	径3mm以下の白、赤色粒子多量含む 褐色 (7.5y r 6/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
16-3	土師器 壺	23.2	-	-	径1mm以下の白色粒子を含む 褐色 (2.5y r 6/6)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
16-4	土師器 壺	13.6	-	-	径1mm以下の白色粒を少量含む にぶい赤褐色 (5y r 5/4)	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ	
16-5	土師器 壺	-	6.0	-	径1mm以下の白色粒子を含む 明褐色 (7.5y r 5/6)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ヘラケズリ	

検出番号	器種	法量 (cm)			胎土 色調	調整 (外周) (内周)	備考
		口径	底径	器高			
16-6	土師器 土台甕	-	3.6	-	1mm以下の白色粒子を多量含む 褐色 (5y r 6/6)	体部ヘラケズリ ヘラケズリ	高台と体部の接合部分に ヨコナデ
16-7	土師器 甕	-	6.2	-	3mm以下の白色粒子を含む 赤褐色 (10 r 6/6)	体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ヘラナデ	底部に9箇の孔有り。
16-8	土師器 小甕	11.8	7.5	13.6	3mm以下の赤、白色粒子多量含む 褐色 (7.5 y r 6/6)	I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ ヨコナデ ミガキ	内周黒色処理。放射状の 縞文有り。

T a 1号壺穴状遺構

18-1	須恵器 坏	14.4	7.6	3.8	1mm以下の白色粒子を含む 灰褐色 (7.5 y r 5/2)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	焼成甘い
18-2	須恵器 坏	14.6	7.2	3.1	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (7.5 y 4/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	焼成甘い
18-3	須恵器 坏	13.4	4.8	3.7	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (10 y 5/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	
18-4	須恵器 坏	14.0	6.2	4.0	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (N6/0)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	一部焼成甘く灰白色(5y r 8/2)を帯する
18-5	須恵器 坏	16.4	6.4	3.8	1mm以下の黒色粒子少量含む 灰白色 (7.5 y 8/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	内周二次焼成有り
18-6	須恵器 坏	14.2	6.2	3.9	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (5 y 6/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	
18-7	須恵器 坏	13.8	6.6	3.7	1mm以下の白色粒子少量含む 灰色 (7.5 y 6/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	
18-8	須恵器 坏	15.4	-	4.1	1mm以下の焼土粒子を含む 淡褐色 (5 y r 8/4)	坏部ロクロナデ ロクロナデ	焼成甘い
18-9	須恵器 坏	14.2	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 灰白色 (2.5 y 7/1)	坏部ロクロナデ ロクロナデ	
18-10	須恵器 高台坏	11.0	6.1	4.3	1mm以下の白色粒子少量含む 灰黄褐色 (10 y r 6/2)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り後ヘラナデ・高台付 ロクロナデ	
18-11	須恵器 甕	21.6	-	-	1mm以下の白色粒子を含む 灰色 (7.5 y 5/1)	I線部ヨコナデ ヨコナデ	
18-12	土師器 坏	12.6	-	-	2mm以下の赤色粒子多量含む 淡褐色 (5 y r 8/4)	I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ミガキ	内周黒色処理、縞文を認 める
18-13	土師器 壺	15.4	-	-	1mm以下の白色粒子を含む 褐色 (5 y r 6/6)	I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラナデ	
18-14	土師器 甕	18.2	-	-	1mm以下の白色粒子少量含む 淡黄褐色 (7.5 y r 8/6)	I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラナデ	
18-15	土師器 甕	21.2	-	-	1mm以下の黒色粒子多量を含む 褐色 (5 y r 7/6)	I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ ヨコナデ ヘラナデ	

T a 2号壺穴状遺構

21-1	土師器 鉢	10.4	-	5.8	1mm以下の白色、黒色粒子多量含む 褐色 (7.5 y r 7/6)	I線部ヘラケズリ・体部ヘラケズリ ミガキ ミガキ	外縁のごく一部に赤形の 縞線有り
21-2	須恵器 坏	14.4	6.2	4.4	1mm以下の白色粒子を少量含む 灰白色 (2.5 y 8/2)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	

D 1号土坑

23-1	須恵器 坏	13.6	4.5	4.0	1mm以下の白色粒子を少量含む 灰色 (10 y 5/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	
------	----------	------	-----	-----	----------------------------------	---------------------------	--

D 3号土坑

26-1	土師器 壺	15.4	6.2	23.0	1mm以下の白、黒色粒子多量含む 褐色 (7.5 y r 7/6)	I線部ハケメ後ヨコナデ・体部ハケメ後ヘラケズリ I線部ハケメ後ヨコナデ・体部ヘラケズリ	I頸基部にヘラケズリ残る。 二次焼成有り
26-2	土師器 甕	16.0	5.8	20.5	2mm以下の砂粒を多量含む 褐色 (10 y r 8/6)	I線部ヨコナデ、I頸基部に強いヨコナデ・体部不明 I線部ヨコナデ・体部ナデ後ミガキ	I頸基部にヘラケズリ残る。 二次焼成有り
26-3	土師器 壺	13.4	4.4	19.2	1mm以下の白、黒色粒子多量含む 褐色 (5 y r 6/6)	I線部ハケメ後ヨコナデ・体部ハケメ後ヘラケズリ I線部ハケメ後ミガキ・体部ヘラケズリ後強いミガキ	I頸基部にヘラケズリ残る。 二次焼成有り
26-4	土師器 甕	11.2	5.6	15.7	1mm以下の白、黒色粒子多量含む 褐色 (5 y r 7/6)	I線部ハケメ後ヨコナデ・体部ハケメ後ヘラケズリ I線部ハケメ後ヨコナデ・体部ヘラケズリ	I頸基部にヘラケズリ残る。 二次焼成有り
26-5	土師器 甕台	9.2	11.0	9.3	1mm以下の白色粒子少量含む 黄褐色 (7.5 y r 8/8)	坏部I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ・脚部ミガキ 坏部I線部ヨコナデ・体部ミガキ・脚部ヘラナデ	二次焼成有り
26-6	土師器 甕台	9.0	12.7	8.0	1mm以下の白色粒子少量含む 淡黄褐色 (7.5 y r 8/4)	坏部I線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ・脚部ミガキ 坏部I線部ヨコナデ・体部ミガキ・脚部ヘラナデ	

遺構外出土遺物

29-1	須恵器 坏	13.4	7.0	4.2	1mm以下の白、黒色粒子多く含む 灰色 (10 y 6/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	
29-2	須恵器 坏	-	6.6	-	1mm以下の白色粒子少量含む 灰白色 (10 y 7/1)	坏部ロクロナデ・底部右回転糸切り ロクロナデ	

検出番号	器種	寸法(cm)			胎土調	調整 (外面) (内面)	備考
		口径	底径	器高			
29-3	須恵器 壺	18.2	-	-	1mm以下の黒色粒子含む 青灰色 (5P B6/1)	口縁部タタキメ後ヨコナデ ヨコナデ	
29-4	土師器 壺	13.2	-	-	1mm以下の白色粒子多量を含む 褐色 (7.5y r7/6)	口縁部ハケメ後ヨコナデ・外部ヘラケズリ ハケメ ヘラケズリ	二次焼成有り
29-5	土師器 壺	16.6	-	-	1mm以下の白色粒子含む 浅黄褐色 (7.5y r8/4)	口縁部ミガキ ヨコナデ	
29-6	土師器 高坏	-	-	-	2mm以下白色粒子、葉片多含む 褐色 (5y r7/6)	脚部ハケメ ヨコナデ	
29-7	土師器 台付壺	-	7.2	-	1mm以下の白色粒子多量含む 褐色 (2.5y r7/6)	脚部ハケメ後ヘラケズリ ヘラケズリ	

金属製品観察表

検出番号	器種	材質	特徴
18-17	銅貨	銅	秤符元質(1008)、表面はやや摩滅している。両書。
19-18	鏝	鉄	全体に強く錆が付着。
21-3	釘	鉄	全体に強く錆が付着。
27-1	釘	鉄	全体に強く錆が付着。
28-1	釘	鉄	全体に強く錆が付着。
-	鉄滓	-	多孔質で、鉄分を含んでいる。最大径34cm、重量22g、T a 1出土

石製品観察表

検出番号	器種	材質	特徴
9-38	砥石	軽石	円形、全面に使用痕を認める。
18-16	砥石	砂岩	方形、両方に使用痕を認める。

玉類観察表

検出番号	器種	材質	最大径 (cm)	穴径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠損状態	出土 位置	備考
9-39	管玉	碧玉	0.6	0.2	2.1	1.31	完形	H1床直	
9-40	管玉	碧玉	0.6	0.3	2.0	1.52	完形	H1床直	
9-41	管玉	碧玉	0.7	0.3	2.4	1.82	完形	H1床直	
9-42	管玉	碧玉	0.8	0.1	2.3	2.93	完形	H1床直	
9-43	管玉	碧玉	0.6	0.3	2.2	1.67	側面に一薄欠損	H1床直	
9-44	管玉	碧玉	0.7	0.2	2.9	2.27	完形	H1壁際	
9-45	管玉	碧玉	0.7	0.2	2.3	2.11	完形	H1床直	
9-46	管玉	碧玉	0.5	0.2	2.2	1.09	完形	H1床直	
9-47	管玉	碧玉	0.7	0.2	2.3	1.74	完形	H1壁方	
9-48	白玉	滑石	0.6	0.2	0.25	0.12	完形	H1床直	
9-49	白玉	滑石	0.6	0.15	0.4	0.23	一部欠損	H1壁方	
9-50	土玉	土製品	1.5	0.2	1.4	3.43	完形	H1カマド	
16-9	ガラス小玉	ガラス	0.6	0.15	0.5	0.35	完形	H4床直	
16-10	白玉	滑石	0.55	0.2	0.4	0.15	ほぼ完形	H4壁方	

# 第V章 考察

## 第1節 調査のまとめ

本遺跡の発掘調査によって確認された遺構・遺物についての所見を述べてまとめたい。なお、D2号土坑出土の人骨について長野県看護大学教授多賀谷昭氏に鑑定を依頼した。その結果報告は次節を参照されたい。

調査対象地内から検出された遺構は竪穴住居4軒、竪穴状遺構2軒、土坑3基、楯列3列、ピットが合計39基である。各遺構の所産時期を出土遺物などから勘案すると、以下ようになった。

### H1号竪穴住居

出土した遺物の形態を観察すると、坏では内面に稜を有し口縁を外反させる古墳時代中期、いわゆる「和泉期」に見られる形態を持つものと、古墳時代後期「鬼高期」に見られる須恵器坏蓋模倣坏の両者を認める。要は口縁部の外反が弱いものが多く、鬼高期の前葉に当たるものと思われる。これらから本住居址は和泉期末から鬼高前期頃、おそらく主体は鬼高前期、6世紀前葉の所産であると思われる。

### H2号竪穴住居

出土遺物は量が少なくまたそのほとんどが破片であるため遺構の正確な所産時期を知る事は難しい。回転糸切りの底部を残す須恵器坏破片やロクロ成形の土師器坏破片、土師器の高台付碗底部の破片などが数点見られることから、平安時代9世紀前半以降の所産と思われる。

### H3号竪穴住居

出土した遺物の中で図示できた土師器甕は、その形態、調整方法などから古墳時代前期後半のものと考えられる。また本住居址周辺から検出時に確認された台付甕脚部や、本住居址を切るT a 2内から出土した土師器鉢と年代的矛盾はなく、これらも本住居址に関係する遺物であると思われる。

### H4号竪穴住居

出土した須恵器坏は底部に回転ヘラケズリが見られる。土師器甕は比較的厚手で縦方向のヘラケズリを施す處と、口縁部に最大径を持つ薄手の長胴甕を認める。これらの形態から本住居址は奈良時代8世紀第1四半期の所産と思われる。

### 竪穴状遺構

T a 1号竪穴状遺構から出土した須恵器坏などは平安時代9世紀前半代のものがほとんどである。しかし、これらは概ね覆土中から出土しており覆土に混入した物の可能性があり、比較的狀態の良好な床から古銭が出上していることや遺構の形状等から考えて、本遺構は古銭の鋳造年である11世紀前半以降の所産であると思われる。T a 2号竪穴状遺構では覆土内から出土した遺物に時的な矛盾が大きく正確な所産時期は知り得ない。青磁破片の出土から中世の所産と考えるが遺物の出土状況に確定的要素はなく断定はできない。

### 土坑

D1号土坑から出土した須恵器坏は平安時代9世紀のもので土坑の所産も同様と見ていい。D2号土坑は時期を確定できる遺物の出土がなく所産年代を知り得ない。D3号土坑から一括して出土した甕と器台は、その形態から古墳時代前期後半にその所産を求めることができる。

### 楯列

第2号楯列についてはH4号住居址との重複関係からH4号住居址の所産時期である8世紀第1四半期よりも後に作られたもので、P3から出土した須恵器坏は8世紀第3四半期の所産と思われ重複関係との矛盾もない。他の楯列についても出土した遺物はその形態から平安時代の物と思われるが、すべて破片での出土で点数も少ないことから正確な所産時期を知ることは難しい。

楯列の正確な用途は不明である。本遺跡が沖積微高地上の南端に立地する事から沖積低地に面して作られ、北側の微高地上に楯列を伴う施設や楯列に関係する空間の存在の可能性も考えられるが、想像の域を出ない。

### ピット

これらの所産時期については、出土した土器片等を勘案すると、平安時代のもと考えられる。しかし、P4より青磁破片が出土していることから、その所産が中世まで下るものも存在する可能性がある。

宮添遺跡と同じ微高地上で調査された市道遺跡Ⅰ、Ⅱでは、古墳時代中期から奈良、平安時代にかけての集落の存在が明らかになった。本遺跡で認められた遺構はその様相とはほぼ合致しており本遺跡周辺で展開する集落の一部であろう。その中で、今回の調査で発見された遺構・遺物の中で特質的なD3号土坑出土遺物について最後に述べたい。

D3号土坑から出土した甕、器台は上信越自動車道の開発事業に伴う長野市松原遺跡の報告書で示されている土器分類(青木一男 1998)に当てると甕は北陸地方に系譜を求められる外来型の「ハケメ調整く字甕」に前時代からの手法であるヘラミガキが施される甕G類に、器台は内面の後が明確な屈折部を持ち口縁部が強く外反する器台B2類に当たる。これらは長野盆地南部の土器編年に当てはめると松原遺跡様式4、北平編年(青木一男 1996)6期、古墳時代前期後葉の物となる。また佐久地域で出土している古墳時代前期の土器と比較すると、器台B類に該当する器台が濃の峯古墳群において出土しており共存する甕の形態、施された赤彩などから土坑出土の器台に先行する物と思われ、4世紀後半代という古墳の所産時期と考えて古墳時代前期後葉というD3号土坑出土遺物の所産時期に大きな誤差はないと考える。

D3号土坑と同じ古墳時代前期後半の所産としたH3号住居址から出土した甕も、前述のG類に当たる物で、H3号住居址付近で検出された土師器台付壺底部やTa2号竅穴状遺構に混入した土師器鉢とともに、D3から出土した遺物とほぼ同時代の物と考える。出土例は多くないが、佐久地方で確認されている古墳時代前期の土器と比較すると、新海坂遺跡H1号住居址においてD3出土器台と同じB2類に属する器台とTa2に混入した土師器鉢と類似する鉢、またハケメ調整で体部下半と内面にミガキを有するく字甕が出土する。西裏・竹田峯遺跡第4号溝状遺構でも甕G類と土師器鉢が共存しており、D3号土坑とH3号住居址は同時代の所産と考える。

前述した通り佐久地方では古墳時代前期の発掘調査例が少なく、宮添遺跡周辺においても確認された住居址は古墳時代中期までである。沖積微高地の中心ではなく、低沖積地に面した南端に確認された古墳時代前期に当たる土坑と住居址は、当地において古墳時代前期の集落が存在する可能性を示している。今後の調査によって、この時期の様相の解明が進むことを願うものである。

## 主要参考文献

佐久市教育委員会	1976	【市道】
	1999	【市道遺跡Ⅱ】
	1986	【西裏・竹田峯】
	1996	【権現平遺跡・池端遺跡】
	1986	【濃の峯古墳群】
	1996	【寺添遺跡】
御代田町教育委員会	1989	【根岸遺跡】
長野県教育委員会	1996	【大尾山古墳群・北平1号墳】
	1998	【松原遺跡】
田辺昭三	1981	【須恵器大成】
中村 浩	1980	【陶邑】Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
	1990	【研究入門 須恵器】

## 第2節 宮添遺跡から出土した人骨について

長野県看護大学 多賀谷 昭

長野県佐久市の宮添遺跡で1999年に行われた同市教育委員会による発掘で、人骨一体が出土している。人骨が出土した第2号土壌からは時代の手がかりとなる遺物が他に発見されていないので正確な時代は不明であるが、付近の土壌内から出土した遺物の年代からみて、古墳時代から平安時代の人骨と推定される。土壌は直径約1メートルで円形に近く、土壌内の北西部には10cm×23cmの石が存在する。検出された人骨は少量で、保存状態も不良であるが、4本の永久歯の歯冠部が比較的良好に保存されており、被葬者の性、年齢を推定することができた。

### <残存部位>

残存する部位は下顎骨と長骨で、何れも小片となっており、非常にもろい。同定できた骨は次のAからDで、同一個体のものと考えて矛盾はない。

- A. 歯根が残る歯槽部を含む下顎骨の破片多数と、下顎左の大臼歯から第1大臼歯のほか、前歯の一部と思われる破片が存在する。おそらく検出時には歯は下顎骨に釘植していたと思われる。また、第1大臼歯の遠心側には近心側と同程度の隣接面磨耗が存在するので、第2大臼歯も存在していたと考えられる（図版一）。
- B. 右大腿骨の骨体中央部よりやや上の部分で長さ13cmである。
- C. 右脛骨の骨体中央部付近で長さ8cmの破片である。
- D. 大腿骨の骨体の中央部付近と推定される破片でBとCの上に載った形で検出された。

### <埋葬姿勢>

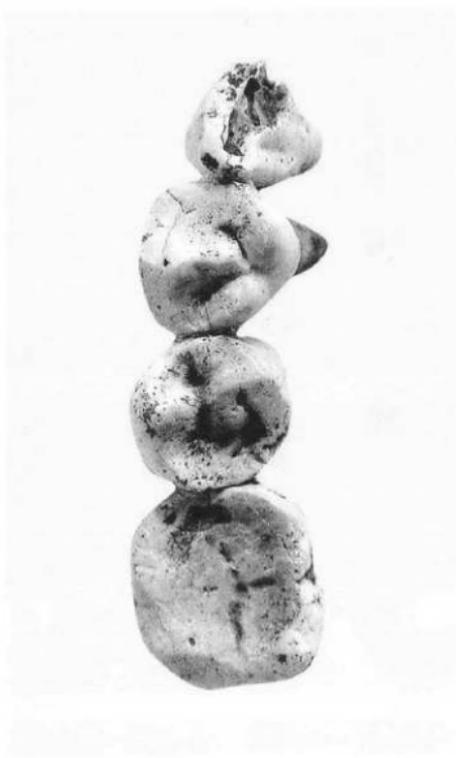
Aの下顎骨と歯は、土壌内北西部に置かれた石の近くから出土し、大腿骨と脛骨が南東部から出土しているので、頭を石の付近に置いて埋葬されていたと推定される。Bの右大腿骨とCの右脛骨とは並んで検出されており、また、出土したが同定できなかった長骨の位置から、膝を強く屈した状態で埋葬されていたものと推定される。

### <性別>

歯は全体に小さい。右大腿骨の粗線付近は破損しているが、きゃしゃで柱状性は見られない。これらのことから被葬者は女性と推定される。

### <年齢>

Aの下顎左第1大臼歯の咬耗はほぼ咬頭間溝に達し、唇側遠心に1mm×3mmの象牙質の露出が見られる。下顎左大臼歯も歯冠の高さが70%程度に摩滅しており、咬合面には象牙質が全体に露出している。これらのことから、年齢は30代と推定される。



宮添遺跡出土の甗

上から順に、左下型大甗、第1小白甗、第2小白甗、第1第白甗（倍率400%）



H1号住居址 (南より)



H1号住居址カマド出土遺物 (南より)



H1号住居址カマド (南より)



H1号住居址P3遺物出土状況 (北より)



H1号住居址掘り方 (南より)



H2号住居址カマド (西より)



H2号住居址掘り方 (西より)



H3号住居址 (北より)



H3号住居址掘り方 (北より)



H4号住居址 (西より)



H4号住居カマド (西より)



H4号住居址掘り方 (西より)



調査風景



Ta1号竪穴状遺構 (北より)



Ta1号竪穴状遺構掘り方 (北より)



Ta2号竪穴状遺構 (北より)



Ta2号竪穴状遺構掘り方 (北より)



D1号土坑 (東より)



調査風景



D2号人骨出土状況 (西より)



D2号土坑 (西より)



D3号土坑（東より）



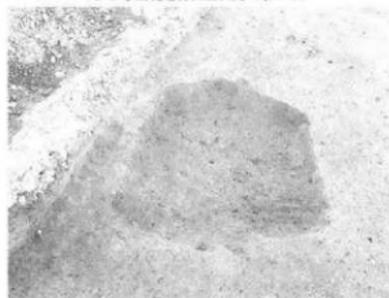
D3号土坑（東より）



D3号土坑遺物出土状況（東より）



D3号土坑遺物出土状況（西より）



D3号土坑（東より）



横列・ピット出土状況（西より）



宮添遺跡近景（北西より・株式会社ユーアル測量設計撮影）



H1 8-1



H1 8-2



H1 8-3



H1 8-4



H1 8-5



H1 8-6



H1 8-7



H1 8-8



H1 8-9



H1 8-10



H1 8-11



H1 8-12



H1 8-13



H1 8-14



H1 8-15



H1 8-16



H1 8-17



H1 8-18



H1 8-19



H1 8-20



H1 8-21



H1 8-22



H1 8-23



H1 8-24



H1 8-25



H1 8-26



H1 8-27



H1 8-28



H1 9-33



H1 9-34



H1 9-29



H1 9-30



H1 9-31



H1 9-32



H1 9-35



H1 9-36



H1 9-37



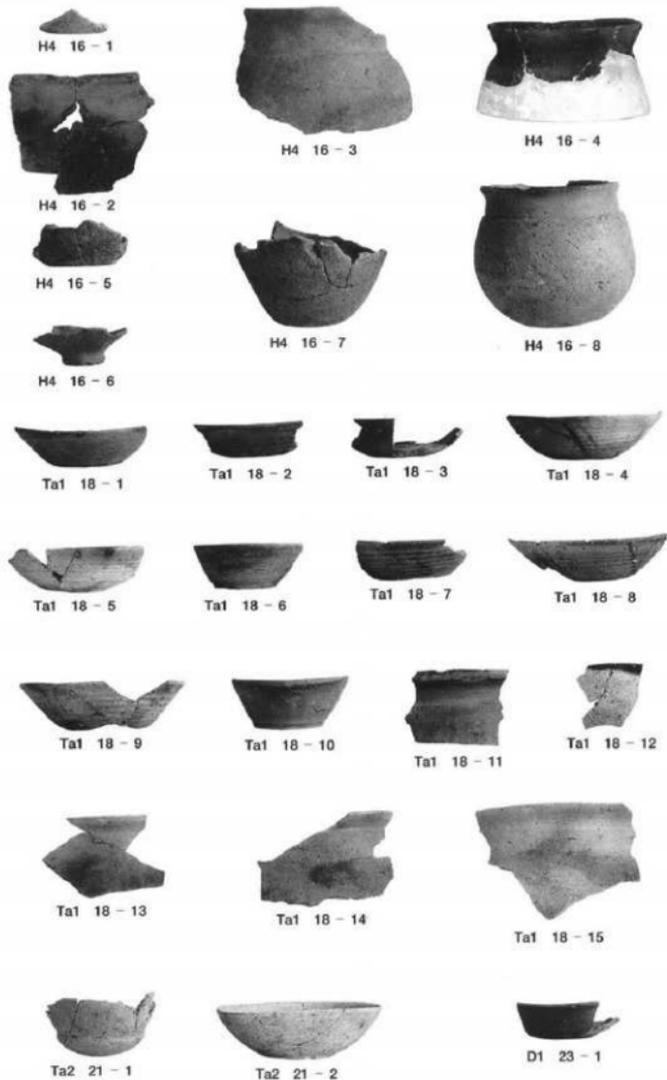
H2 11-1



H2 11-2



H3 13-1





D3 26 - 1



D3 26 - 2



D3 26 - 3



D3 26 - 4



D3 26 - 5



D3 26 - 6



遺構外 29 - 1



遺構外 29 - 2



遺構外 29 - 3



遺構外 29 - 4



遺構外 29 - 5



遺構外 29 - 6



遺構外 29 - 7



Tal 18 - 17



Tal 19 - 18



Tal 21 - 3



第2号横列 27 - 1



P 28 - 1



H 1 9 - 38



Tal 18 - 16



H1 9 - 39



9 - 40



9 - 41



9 - 42



9 - 43



9 - 44



9 - 45



9 - 46



9 - 47



9 - 48



9 - 49



9 - 50



H4 10 - 9



10 - 10



宮浜遺跡全体図 (1:100)

## 佐久市埋蔵文化財調査報告書

- |   |  |
|---|--|
| <p>第1集 『金井城址』</p> <p>第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』</p> <p>第3集 『石附殿Ⅲ』</p> <p>第4集 『大ふけ遺跡』</p> <p>第5集 『立科F遺跡』</p> <p>第6集 『上曾根遺跡』</p> <p>第7集 『三貫畑遺跡』</p> <p>第8集 『瀧の下遺跡』</p> <p>第9集 『国道141号線関係遺跡』</p> <p>第10集 『壘原遺跡Ⅱ』</p> <p>第11集 『赤原垣外遺跡』</p> <p>第12集 『若宮遺跡Ⅱ』</p> <p>第13集 『上高山遺跡Ⅱ』</p> <p>第14集 『栗毛坂遺跡』</p> <p>第15集 『野馬久保遺跡』</p> <p>第16集 『石堂城跡』</p> <p>第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』<br/>(1月～3月)</p> <p>第18集 『西曾根遺跡』</p> <p>第19集 『上芝宮遺跡』</p> <p>第20集 『下壘原遺跡Ⅲ』</p> <p>第21集 『金井城跡Ⅲ』</p> <p>第22集 『市内遺跡発掘調査報告1991』</p> <p>第23集 『南上中原・南下中原遺跡』</p> <p>第24集 『上壘原遺跡』</p> <p>第25集 『上久保田向遺跡Ⅳ』</p> <p>第26集 『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』</p> <p>第27集 『上久保田向遺跡Ⅲ』</p> <p>第28集 『曾根新城Ⅴ』</p> <p>第29集 『筒村遺跡B 山法師遺跡B』</p> <p>第30集 『市内遺跡発掘調査報告1992』</p> <p>第31集 『山法師遺跡A 筒村遺跡A』</p> <p>第32集 『東ノ副』</p> <p>第33集 『壘原遺跡Ⅶ 下曾根遺跡Ⅰ<br/>前藤部遺跡2』</p> <p>第34集 『西一本柳遺跡Ⅰ』</p> <p>第35集 『市内遺跡発掘調査報告1993』</p> <p>第36集 『蛇塚B遺跡Ⅲ』</p> <p>第37集 『西一本柳遺跡Ⅱ 中西の久保遺跡Ⅰ』</p> <p>第38集 『南下中原遺跡Ⅱ』</p> <p>第39集 『中殿敷遺跡』</p> <p>第40集 『寺畑遺跡』</p> <p>第41集 『曾根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ<br/>上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ<br/>西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ』</p> | <p>第42集 『寄山』</p> <p>第43集 『横現平遺跡・池端遺跡』</p> <p>第44集 『寺添遺跡』</p> <p>第45集 『市内遺跡発掘調査報告1994』</p> <p>第46集 『濁り遺跡』</p> <p>第47集 『上芝宮遺跡Ⅴ』</p> <p>第48集 『池端城跡』</p> <p>第49集 『根々井芝宮遺跡』</p> <p>第50集 『藤塚遺跡Ⅲ』</p> <p>第51集 『寺中遺跡 中壘敷遺跡Ⅱ』</p> <p>第52集 『坪の内遺跡』</p> <p>第53集 『円正坊遺跡Ⅱ』</p> <p>第54集 『市内遺跡発掘調査報告1995』</p> <p>第55集 『香原前遺跡Ⅰ・Ⅱ』</p> <p>第56集 『聖原遺跡Ⅹ』</p> <p>第57集 『高師町遺跡Ⅱ』</p> <p>第58集 『下虫穴遺跡Ⅰ』</p> <p>第59集 『市内遺跡発掘調査報告1996』</p> <p>第60集 『曾根城遺跡Ⅱ』</p> <p>第61集 『割地遺跡』</p> <p>第62集 『野馬久保遺跡Ⅱ』</p> <p>第63集 『西大久保遺跡Ⅲ』</p> <p>第64集 『祭の木遺跡Ⅳ』</p> <p>第65集 『中宿遺跡』</p> <p>第66集 『中西ノ久保遺跡Ⅱ 仲田遺跡 寺畑遺跡Ⅱ』</p> <p>第67集 『供養塚遺跡』</p> <p>第68集 『麻原部遺跡』</p> <p>第69集 『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』</p> <p>第70集 『観音堂遺跡』</p> <p>第71集 『市内遺跡発掘調査報告1997』</p> <p>第72集 『市道遺跡Ⅱ』</p> <p>第73集 『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』</p> <p>第74集 『五里田遺跡』</p> <p>第75集 『八風山・五斗代』</p> <p>第76集 『南近津遺跡』</p> <p>第77集 『香原前遺跡Ⅲ』</p> <p>第78集 『蛇塚遺跡 蛇塚古墳』</p> <p>第79集 『四ッ塚遺跡Ⅰ』</p> <p>第80集 『四ッ塚遺跡Ⅱ』</p> <p>第81集 『薬師寺遺跡』</p> <p>第82集 『市内遺跡発掘調査報告1998』</p> <p>第83集 『下壘原遺跡Ⅳ』</p> <p>第84集 『権名平遺跡』</p> <p>第85集 『柳堂遺跡』</p> <p>第86集 『市内遺跡発掘調査報告1999』</p> |
|---|--|

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第87集

### 宮添遺跡

2001年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込 3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀 5653

T E L 0267-68-7321

印刷所

〒385-0043 長野県佐久市取田町 120-4

株式会社 コックス

